

平和・主権・歴史正義 の実現に向けて



2025・8・15ソウル大会報告集

【目 次】

発刊にあたって

「光復80年8・15汎市民大会訪韓団の参加意義」西山直洋	4
「記憶と感動、そして決意を新たにするために」宋世一	5

歓迎挨拶

「反米自主、反戦平和の旗を高く掲げ」キム・ジェヨン	6
「自主なくして平和は成し遂げられない」イ・ホンジョン	6
「光の革命を我々が団結して達成するという決意の場に」ハン・チュンモク	7
写真と映像で見る8・15ソウル大会	8

参加者からの感想文

「光復80年韓国訪問団広島チームで初めて訪韓して」奥村弘	9
「韓国旅行を終えて」武田隆二	10
「何百枚ものなびく組合旗を見て」中村愛	10
「あらためてく歴史は民衆が拓く」永久睦子	10
「同じ人間だと思い続けることができるように」田島茂恵	11
「圧倒的に若い集会デモ参加者に驚き」佐々木伸良	12
「人民力に感激」浅川肇	13
「日本では味わえない迫力に感動」藤井健一	14
「民主化の発展を担う若者たちと共に行動する」野崎正輝	14
「敗戦記念日であることを強く思った意義深い旅」佐野彰	15
「若い青年学生の姿に祖国の将来への希望を見た」趙基峰	16
「通訳の役得」李俊一	16
「風穴を開けるエネルギー」久保有美	17
「2度目の韓国訪問」荒岡壱星	18
「人のつよさ・やさしさに出会う」田中文子	19
「8月15日にソウルで考えたこと」井手窪啓一	20
「日韓平和連帯8・15訪問団に参加して」大森正子	20
「尹錫悦罷免を実現した闘いの現場で」崔誠一	21
「韓国民衆の気概と熱量を実感できた」中山茂	22
「平和・主権・歴史正義実現汎市民大会」に参加して」小林勝彦	23
「独裁者と闘い続けてきた民衆こそが真の平和運動家」車有悟	24
「朝鮮民族として血のたぎる熱い思い」柳隆範	25
「やさしさにつつまれた旅」井上泰子	25
「熱い濃い3日間」荒岡誠二	26
「2度目の訪韓」荒岡咲歩	27
「8・15光復節 集会そしてデモ まるで夏フェス」河原和子	27
「刺激に満ちたチーム広島としての行動」崔保	28
「初めての韓国への旅を終えて」田中美穂	30

「心揺さぶられた2025・8・15」笠松玲子	31
「原爆80年 被爆80年 光復80年」尹康彦	31
「訪韓を終えて思うこと」山下裕子	32
「戦争の無い平和な社会の実現に向けて」大村和子	33
「運動が生活することなのだ」と励まされた8・15大会」森永雅世	34
「韓国社会は冷めていない社会でした」白康喜	35
「祖国の大地にたたずみ空を見上げる」金源道	35
「2025・8・15訪韓レポート」横山貴安基	36
「集会のスケールの大きさとデモのエネルギーに圧倒された」吉馴真一	37
「初めての体験で、すごく刺激をもらった」佐久原秀大	38
「歴史の重みと平和の尊さを改めて感じた」平澤悠磨	38
「光復80年韓統連母国訪問団に参加して」李鐵	38
「8・6広島から8・15ソウル、記憶に残る感動の旅」朴隆宏	40
「光復節80年ソウル大会に参加して」安昌浩	41
「本当に重要なのは革命のその後」金承民	41
「母国語学習の結果、自分の思いを伝えることができた」丁勝明	42
「先頭に立って運動をしているのだという事を実感」金美樹	43
「植民地解放80年の光復節大集会に参加して」中西巖	43
「韓国のリアルを見ることができた」久保泉稀	45
「広島の地で＜反米自主＞の声を上げ続けるために」大月純子	45
「あらそわないために たたかい こえをはりあげる」森本すぎな	47
「あの情熱がなくてはね」森本忠紀	47
「全泰壺記念館では涙が出た」薛英子	48
「自主で統一を勝ち取らなければならない」李香代子	48
「民衆が統一の道に導いていく」申久江	49
「希望に生きるものは常に若い」金裕理	49
「一人ひとりの思いを集約できる訪問団になれてよかった」文世賢	50
「パレスチナ人女性との遭遇が最も素晴らしい瞬間でした」升水和繁	50
「光復80年のソウルで」九門りり子	52
「初めてのソウル」石打澄枝	52
「100名にのぼる訪韓団は希望の拡がり」加来洋八郎	53
「韓国国民の素晴らしい熱き思いを生で感じた」江原豊	54
「韓国民衆の闘いを学ぶ旅」楠本雅章	54
「ソウル大会と韓日民衆連帯の新たな第一歩」金隆司	55
編集後記	
「李在明大統領の誕生は、尹錫悦退陣運動のゴールであると同時に、社会大改革運動のスタートだ」金昌五	58

【発刊にあたって】

労働者民衆の解放はまだ終わっていない！

「光復80年平和・主権・歴史正義実現！8・15汎市民大会」訪韓団の参加意義

日韓平和連帯代表 西山直洋

2025年8月15日、光復80年目の年となることでこの訪韓団を具体的に取り組もうと考えたのは昨年の8月のことでした。

どのくらいの団を作ることで参加した人たちが韓国の運動を理解してくれるか、いや、参加する人は意識を持っている人たちなのでそんなことは考える必要はない。今思えばいろいろ悩む中での企画に入りました。まず、80年も経って未だに朝鮮半島の分断を生み出したことに対し、日本が真の謝罪と補償をおこなっていないことや、今、日本国内において増えている差別排外主義の拡大。日本人としてこのような企画をしていいものだろうかとまで考えさせられた訪韓でした。



しかし、韓国に行って新たな運動のスタートをきるしかないと考え、韓統連の皆さんとともに大規模な訪韓事業に取り組みました。南北統一、東アジアの平和、そして世界平和のため、日本での今後の運動に責任を果たすため、役割を担っている重要な今回の訪韓団でした。

さて、集会は、「光復80周年＜未完の光復＞を完成しよう！」「親日極右勢力と尹錫悦（ユン・ソンヨル）勢力の清算」「国民主権政府、韓米日戦争演習中止」「統一先鋒隊を最大規模にする」のスローガンをあげての開催。多くの参加者の一体感が感じさせられました。「光復80年・平和・主権・歴史正義実現8・15汎市民大会」は数万人の規模での民衆参加で開催した取り組みでした。

私たちは、これら力強い闘争を吸収し、日本でどのように広げていけるかが本当の課題です。そして、韓国のように若者を組織することだ。韓国では、いつも大きい集会では学生たちが先頭になって集会等を盛り上げている。全体的に韓国の人たちに学ばなくてはならないことがたくさんあった訪韓でした。

日本人として「謝罪と補償の意味」「歴史を継承する」ことなどを一番考えなければならないことだと考えています。加害国日本は、過去の歴史を消す動きをするのではなく、謝罪し続ける必要があります。時の政権によって対応を変えてはいけないと80年経った今、大きな声をあげたいと思います。このことを思い、今回一緒に行ったメンバーたち同志の皆様にご感謝し、私の訪韓記の挨拶文とさせていただきます。

記憶と感動、そして決意を新たにするために

韓統連委員長 宋世一（ソン・セイル）

私たち韓統連（在日韓国民主統一連合）は、日本帝国主義による植民地支配を脱し解放を勝ちとった光復から80年を迎えるにあたり、「光復80年 ソウル平和市民大会 韓統連訪問団」を結成。日韓平和連帯(西山直洋代表)および東京と広島で日韓民衆連帯運動を展開する方々と共に約100人規模で8月14～16日の日程で訪韓し、15日にソウルで開催された「光復80年 平和・主権・歴史正義実現 8.15汎市民大会」（主催：自主統一平和連帯などで構成する推進委員会）に参加しました。



訪問団は14日、韓国進歩連帯、進歩党、民主労総、全農などが開催した歓迎交流会に参加。熱烈な歓迎を受け交流を深めながら、翌日の汎市民大会の成功を誓いあいました。

15日は「美しい青年 全泰壹記念館」と「戦争と女性の人権博物館」を参観。全烈士の生きざまを学び、日本軍「慰安婦」問題への理解を深めました。

午後7時からソウル南大門で開催された汎市民大会に参加。オープニングで各団体のメンバーが団体旗を空に向けて高くなびかせながら続々と入場し、参加者に圧倒的な感動を与え会場をひとつにしました。韓統連と日韓平和連帯が司会者から正式に紹介され熱烈な歓迎を受けました。汎市民大会の特徴は青年学生を中心に進行したことです。若い世代が発散するエネルギーは大会の雰囲気最後まで高揚させました。大会後の行進では韓統連の代表団が先頭に立ち、平和・主権・歴史正義を実現しようと声をあげました。また、力強く行進する青年学生先ぼう隊の姿は未来への希望を抱かせる頼もしいものでした。

16日には自主統一平和連帯の事務所で解団式を開催。韓統連が「光の革命」の中で闘い続けてきたことを体感し、「光の革命」を完遂するために反米自主運動をさらに強力に推進することなどを成果と課題として共有しました。

今回発刊するこの「8・15ソウル大会報告集」には、祖国訪問の喜び、汎市民大会での感激と感動、行進での胸の高鳴り、参観事業での学びと気づき、国内同胞・連帯関係者との熱い連帯が生み出す高揚と一体感など、そして運動への自負とこれからの闘いへの決意がつづられています。一読すれば、誰もが記憶と感動、そして決意を新たにすることでしょう。

光復80年訪問事業における参加者全員の活躍に再度敬意を表し、これからも共に前進することを誓いながら、発刊に寄せる言葉とします。

【歓迎挨拶】

反米自主、反戦平和の旗を高く掲げ

進歩党 キム・ジェヨン常任代表

遠く日本の地から来られた韓統連の皆さん、日韓平和連帯の皆さん、心から歓迎いたします。進歩党の常任代表をしていますキム・ジェヨンです。

民主主義と平和、自主のための韓国の闘いに、日本の地から熱い連帯を頂きまして本当にありがとうございます。

進歩党は反米自主、反戦平和の旗をどこよりも高く掲げている政党です。そのせいでこの間、長く弾圧されたり、苦しい時期がありましたが、労働者、農民の方々、市民の方々の応援によって、今は国会議員が4名になり、党員が10万名という政党に成長しました。

進歩党は光復80周年を迎えて未完の光復を取り戻す、自主統一の道を切り開く、そのような道の先鋒隊になっていくことを決意しています。

皆さんと共に一日も早く自主、平和統一の時代を迎えるために頑張っていきたいと思っています。よろしくお願いします。



自主なくして平和は成し遂げられない

自主統一平和連帯 イ・ホンジョン常任代表議長

皆さん、お会いできてうれしいです。

今年、光復80周年を迎えますけれども、日本の植民地支配にされて156年の歳月が経ちました。戦争というのは加害者、被害者すべてを非人間的にしていきます。ですから解放80年の闘いで我々が人間的に解放される、そのための闘いであったと思います。

分断によって形成された日米同盟、韓米同盟を主軸として米国はアジアに対して覇権を進めてきました。そして今は韓米日の3国同盟をもってインド・太平洋地域に影響力を伸ばしています。

植民地支配から156年、光復80年が我々に示す教訓とは、自主なくして平和は成し遂げられないということです。

今回来られました海外の皆さんと共に反民主的な米国の策動から解放されなければなりません。光復80年汎市民大会は、韓国と日本の平和を愛する人々の新しい時代を開く信号弾になるでしょう。自主的な人間として、平和的な人間として、真の人間として、これから生きていかれることを願っています。

皆さんを心から歓迎します。ありがとうございました。



光の革命を我々が団結して達成するという決意の場に

韓国進歩連帯 ハン・チュンモク常任代表

心から歓迎します。

司会者が申しあげたとおり、昨年の尹錫悦（ユン・ソンヨル）の非憲法的な戒厳令に我々は闘って勝利しました。すべての国民の力によって民主主義、光の革命を成し遂げました。

この闘いに共に闘ってくれました日本の平和運動をされている方々、そして同胞の皆さんに心から感謝を申し上げます。そして、我々は光の革命をさらに発展させて真の自主を成し遂げ、平和と統一への道へと進む新たな道を歩こうとしています。

今日この場は光の革命を我々が団結して達成するという決意の場にしていければと思います。韓日の間で平和の旗を掲げる皆さんがその主人公です。この場は小さい会場ですけれども、だからこそ皆さんと分かち合う、そのよう場になれば良いと思います。

皆さんに感謝します。ありがとうございました。



【写真で見る８・１５ソウル大会】

※リンクをクリックすると写真・動画のページに移動します。ソフトの設定によってはページへのアクセス許可が求められる場合がありますので、その際は「許可」をクリックして御覧ください。

< 8月14日 >

光復80年 海外代表団歓迎晩さん会

<https://photos.app.goo.gl/g1DercRZQYKuP41b7>

< 8月15日 >

戦争と女性人権博物館

<https://photos.app.goo.gl/iCA8XHgEPQ44mFgs7>

全泰堯記念館

<https://photos.app.goo.gl/nRnbCqAzJLNL88re8>

統一ピビンバ

<https://photos.app.goo.gl/bx9fk3589A8xGzcY7>

平和・主権・歴史正義実現 汎市民大会

<https://photos.app.goo.gl/KvW4YkbwED5xQvTA7>

平和・主権・歴史正義実現 汎市民大行進

<https://photos.app.goo.gl/tZ1xqV2VmR8Ke6wm9>

< 8月16日 >

韓統連・韓青の解団式

<https://photos.app.goo.gl/yXeHBzonsDaS3suh9>

自主・統一・平和連帯（韓国）と海外同胞代表団（韓統連と在米韓国人青年団体）との懇談会

<https://photos.app.goo.gl/fbucMXqgV5SLThgRA>

【映像で見る８・１５ソウル大会】

https://youtu.be/4myhM_5hrsg

【参加者からの感想文】

光復80年韓国訪問団広島チームで初めて訪韓して

奥村弘

私が日本の植民地支配の歴史に関心を持ったのは、今から十数年前、派遣で働いていたころ、職場の同僚や友人から日本の植民地支配を肯定するような発言を聞くことが多くあり、当時の私はそのような発言に対し自分の考えを言うほどの知識もなく何も言えずにいたことが発端でした。その後、日本軍「慰安婦」問題や強制動員問題、在特会へのカウンターや朝鮮学校「無償化」裁判の支援に関わる中で、少しずつ知識を得ることが出来ましたが、ここ数年間、私は機会があればいつか韓国を訪れて、日本の植民地支配の歴史を物語る場所や施設に行き、もっと理解を深めたいと考えていました。そんな折、光復80年の節目の年に訪韓のお誘いを頂き、韓国を訪れることが出来て本当に感謝しています。

今回の訪韓では、映画で観た場所や沢山の博物館や記念館を訪れることが出来ました。本当に衝撃を受けた展示や、印象に残る展示が沢山ありました。まだまだ頭を整理できていない状態ですが、何より一番印象に残っていることは、色々な方々と交流する中で、韓統連の方々や韓国の市民の皆さんの民主化を求める本気さや真剣さを感じたことでした。

ホテルでお酒を飲みながら、歴史のことを真剣に語り、博物館や記念館を一緒に見学しながら、知らないことを沢山教えて頂きました。団結交流会や漢江（ハンガン）クルーズを準備してくださった韓国市民の方々、私は韓国語が全く分かりませんが、そういった人と人との繋がりを感じることが出来ました。また、自主統一平和連帯事務所で行われた解団式では、康宗憲（カン・ジョンホン）さんのお話の中で（急いで携帯に走り書きしたので不正確かもしれませんが）「（植民地支配は）加害者の人間性も被害者の人間性も失われる」という言葉がとても印象に残りました。ご自身が死刑判決を受けられ、西大門刑務所に投獄された当事者の方の言葉を、この場所で伺うことが出来たことは、本当に貴重な経験だと思いました。

今回見学した多くの博物館や記念館の展示からは、韓国の民主化の歴史の重み、それが現在に繋がっているという共通したものを感じました。このような感覚が多くの人に共有されているからこそ、「光復80年 平和・主権・歴史正義実現8, 15汎市民大会」のような集会やデモをすることが出来るのだと思いました。

最後に「チーム広島」として今回訪韓が出来て本当に良かったです。特にホテルで同室させて頂いた朴隆宏（パク・ユンガン）さんには、私の疑問や質問に真摯に答えてくださり本当に感謝しています。ホテルや見学先で沢山のことを教えて頂いた金利明（キム・イミョン）さん、崔保（チェ・ボウ）さんとご一緒出来たことを光栄に思います。そして今回の旅の準備を下さった尹康彦（ユン・ガンオン）さん、大月純子さん本当にありがとうございました。

帰国した今、日本の民主化、そして朝鮮半島の統一のために、出来ることをしていきたいと思います。

韓国旅行を終えて

武田隆二

以前から行って見たかった韓国旅行に同行させていただき、ありがとうございました。30年ぶりのソウルは、都会のビルとネオンであふれていました。

二日目の全泰堯（チョン・テイル）記念館が特に印象に残っています。彼が17歳のとき、一日50ウオンの収入にも関わらず、寝泊まりしていた女工にたい焼き30個を毎日差し入れしていた話に感動しました。ふと私の幼年時代を思い出したのです。1962～3年ですが、当時はいつも腹を空かせていた記憶があります。日曜の昼前に父からいつもタバコを買ってくるように言われるのを楽しみにしていました。200円でおつり80円は小遣いにできるからです。当時は20円でたこ焼き6個買えました。家の玄関を出て「ミーちゃん」と大声を出すと近所の幼児3～4人が家の庭に集まりました。皆でたこ焼きを食べに行くのです。たこ焼きのお礼だと言われ、ミーちゃんの父に連れられ、桜井市浅古にあるイチゴ畑で3～4人腹一杯いただいた記憶がよみがえりました。あの時は皆貧しかった。でも豊かな近所付き合いや人間関係があった。かつてよりお互いに豊かになった今、なぜギクシャクしたのだろうか。光化門前の広場で、光復80年の市民集会に参加しながらこれを問い続けました。

南北統一を目指すこの難しいテーマのデモをビートルズのコンサートに行く乗りで現地の女子大生多数と楽しく参加させていただいたことに感謝します。この記憶は生涯の記念として大切にしたいと思いました。

何百枚ものなびく組合旗を見て

中村愛

光復80周年記念市民集会に参加して、スケールの大きさにびっくりしました。始まってすぐの組合旗を持って行進する姿は堂々としていてすごく格好良かったです。特に、学生や若い人達が生き生きとしている姿は心を揺さぶられる瞬間でもありました。

大阪や日本でこんな風な集会が出来るだろうか？果たして、こんな風に何万人もの人が集まるだろうか？

労働組合の若者離れが進む中、私達はこれから何を伝えていけばいいのか。韓国の集会を見て、これからの課題として考えていかなければいけないと感じた3日間でした。

あらためて「歴史は民衆が拓く」

永久睦子

2025年の「8・15」は、日本の敗戦・朝鮮光復80年。日韓基本条約60年、治安維持法100年という、日本人にとって非常に重く辛い歴史の節目でしたが、韓国では、尹錫悦（ユン・ソンヨル）大統領による非常戒厳令に、市民・国会議員が即刻国会に集

結し、「戒厳令解除決議案」を可決、4か月後には「大統領罷免」という勢いの中で迎えました。

今回は早くから準備を進めて、訪韓する人、送る人が一緒に学習会を重ね、成果を共有することとしました。まず、韓統連の金昌五（キム・チャンオ）さんから、大統領罷免に至るドキュメントと韓国情勢について、康宗憲（カン・ジョンホン）さんからは、初代李承晩（イ・スンマン）大統領から尹錫悦まで、歴代軍事独裁政権に対する韓国民衆の闘いを振り返り、「歴史は民衆によって拓かれるのです」と。続いて、日本の植民地支配や侵略を明記しない「日韓条約」に触れ、「この問題になると日本では『自虐史観だ』との反論が返ってくるが、『自虐』ではなく『自省観』をもって、アジアの人々と歴史観を共有しなければ、真の和解も未来志向もない」と。さらに「治安維持法100年」に言及し、この「法」によって逮捕され、獄死した朝鮮人詩人・尹東柱（ユン・ドンジュ）氏の詩を朗読、解説し、この悪法を真に廃止し、彼の尊厳を回復させなければならない」と強調されました。

こうして8月14日、10代から90代まで50人近い団でソウルに到着。熱い歓迎を受け、翌15日は夕方から集会とデモ。驚いたのは青年と女性が多かったことです。歯切れのいい発言、はじけるようなパフォーマンスに目を見張りました。尹錫悦を倒したエネルギーによるものなのでしょうか。

最後に、私にとって今回の訪韓のキーワードは「歴史は民衆によって拓かれる」でした。そして熱く思い起こしたのは、定時制高校3年生の日本史の山口先生による「最後の授業」でした。「みんな、オレの授業で一番心に残った言葉は何だ？」……誰も手を挙げない……しびれを切らした先生は「オレが一番伝えなかったことは『虐げられた者が、虐げる者に対して闘いを挑んできた歴史』だ。人は生きてそれをバトンタッチする。オレが生きてお前たちが生きる。それが歴史なんだ」。

「歴史は民衆が拓く」という言葉も、山口先生の言われた「歴史とは…」も、そして韓国で何度も聞いた「私たちは必ず勝ちます」も、みな同義語です。私もがんばって、いつか自分の言葉で続く人に伝えたいと、しきりに思った2025年「8・15」訪韓でした。

同じ人間だと思い続けることができるように

田島茂恵

2018年、チンチャコリア（本当の韓国）のスタディツアーに参加させていただき、金昌五（キム・チャンオ）さんと永久睦子さんに出会いました。振り返ると、チンチャ・コリアへの参加が、私の人生の中で自分が変化していくきっかけになったように思います。

それから学習会に参加し、8・15大会にも参加させていただくようになりました。韓国でのデモ・集会への参加は2回目で、やっぱり圧倒され空気感に飲まれていました。ハングルの勉強をせずに参加したことを後悔する時間。なんて言っているのかわか

らない、わかりたい、わからない。絶対勉強するぞ、と帰って来て、未だ手付かず。でも絶対やるぞ、とここに証拠を残しておきたいと思います。

戦争と女性の人権博物館の見学では、すごく怖くなりました。加害と被害。そのどちらも自分の中にあるんだと思いました。日本軍「慰安婦」の被害者も加害者の日本兵もどちらも自分と重なりました。

これまで、戦争と平和の間には明確に線引きがあると思っていたような気がします。終戦を目指すんだからもちろん線引きはあるのですが、人間の中に線引きはなくて、加害をしながら次の瞬間には人を助けたり慈しんだり悲しんだりできる。慰安所の前でチケットを持って並んでいる日本兵の写真からこれが特別なことではなく日常なんだ、自分も同じだと思い怖くなった時間でした。

戦争になると自分もそうせざるを得ない、そうなりたくない、誰にもさせたくない、というように思っていました。先日母が「同じ人間だと思ってないんだよ」と言いました。それって、そうだな、と腑に落ちました。そんなに単純じゃないとは思いますが、自分にできることは何かを考えたとき、同じ人間だと思い続けることができるようにする。違っていてもともに生きていく姿勢、空気感、耳を傾けあって力を合わせて生きていく、そんな人間関係を紡いでいくことの積み重ねが反差別、反戦平和なんじゃないかと思います。

そして時間をつくって集会や学習会にも参加し深め、それをいろんな人としゃべっていきたいと思っています。

お世話になりましたみなさま、ありがとうございました！

圧倒的に若い集会とデモの参加者に驚き

佐々木伸良

2019年以来6年ぶりの韓国訪問でした。初日の夕方からの歓迎会では、日頃から何かとお世話になっている韓統連兵庫の尹元寿（ユン・ウォンス）さん、崔孝行（チェ・ヒョヘン）さんと同席させて頂き会話が弾みました。美味しい韓国料理をお腹いっぱい食べて、韓国進歩連帯、韓統連訪韓団のみなさんとの交流ができ、これだけでも今回の訪韓の意義があったと感じました。

2日目の午前中は「戦争と女性の人権博物館」の見学。日本軍「慰安婦」問題については今までもいくつかの取り組みに参加し、ある程度勉強もしてきたつもりでしたが、展示されているものを見て改めて被害女性たちが日本軍からどれだけの虐待を受けてきたのかを知ることができたと思います。そして彼女たちの日本軍「慰安婦」問題をなかったことにしようとする日本政府への怒りを感じることができました。

午後からは全泰堯（チョン・テイル）記念館を見学。信じられないほど窮屈な空間で長時間労働を強制されていた女性労働者たちのために身を挺して必死に闘った全泰堯さん、その生い立ちから学ぶことから、自分自身の労働運動へのかかわりを見つめ直すことができました。

夕方から「統一ピビンパ」を頂いた後、「8・15全国労働者大会」「光復80年平和・主権・歴史正義実現汎市民大会」に参加しました。結集した労働者・市民の数の多さと参加しているのが圧倒的に若い人たちだったことに驚き、日本の運動とのあまりの差にやっかみもしました。

集会後のデモでは、サウンドカーも同行し活気がありました。若い人たちが先頭になり機動隊と小競り合いになる一幕もあり楽しいデモでした。

3日目は「安重根（アン・ジュングン）義士記念館」を見学。伊藤博文を成敗した彼のみならず、当時の大韓独立活動家たちのアジアの平和を志す思想から日本の活動家は学ぶべきだと感じました。自身4回目の韓国訪問でしたが、良く食べ、良く飲んで交流し、良く学んだ三日間でした。

人民力に感激

浅川肇

第一に感謝したいのは車椅子を用意して下さったことである。これがなければ統一ピビンパやデモ行進に参加できなかったのです。

光復節は、もちろん80年前の日本帝国の敗戦により植民地支配から脱出した解放の記念日、さすがにソウル全体が光り輝きました。日本には市民が一丸となって飲む祝祭日はありません。この光り、輝きは日本帝国が犯した植民地政策の残酷さ、人間の尊厳を根底から奪い取り、男を強制労働に、女を日本軍「慰安婦」へと駆り立てた日本帝国の非人道政策の裏返しと感じ、深く韓国人民への謝罪の念が湧き上がりました。南大門の大通りを埋め尽くした数万の人民、路上に座る労働組合員には若い男女が多く、今や自由を謳歌する若者を見て、嬉し涙を禁じ得ませんでした。

行進では警備側となんらかのトラブルが発生。プラカードのすぐ後の私たち、横15列の行進を走り越してまさに人民の奔流です。車椅子に跳ね上がりながら、これこそ韓国の人民力と強く思いました。3・1独立宣言、4・19革命、光州人民蜂起、ローソク革命、戒厳令反対と脈々と続く人民の力を肌で知ったことは、今回訪韓の最大の喜びです。

戒厳令反対といえ、寒い夜もいとわず駆けつけた婦人が、銃を抑さえて「恥ずかしくないのか」と叱咤したテレビ画面がよみ返えます。日本人ならば「そんなことをして良いのか」というでしょうが、これは規範を他に求めています。「恥ずかしくないのか」は当事者そのものへの叱咤です。「悪を恥じるは義の始めなり」儒教の最も強烈な倫理が、この時発揮されたのです。

光復節前夜は韓国進歩連帯の皆さんによる懇切な歓迎会に招かれました。私は挨拶の中で福岡県門司の出身と自己紹介したところ同席者になんと門司在住の金利明（キム・イミョン）さんがいて、帰国後も交流しています。

光復節の午前中、全泰壹（チョン・テイル）記念館を拝観しました。ここも素晴らしかった。労働運動の業績を讃える記念館は日本にはありません。このことだけでも韓国は先進国です。

帰国日の午前中は、独立を希求し一身を捧げた烈士・安重根（アン・ジュングン）記念館に行きました。見事な書が展示されている一室。私は「忍耐」と書かれたカードを記念品としました。

私と未来を激励する旅でした。深謝です。

日本では味わえない迫力に感動

藤井健一

今回、訪韓団への参加は初めての韓国でもありました。

光復80年の節目の集会・夜のデモ行進に参加して、日本では味わえない迫力に感動しました。戦争と女性の人権博物館では、「慰安婦」被害者の生々しい性暴力と差別の体験談、全泰堯（チョン・テイル）記念館では、体を張って抗議した全泰堯さんの労働運動への思い。現地に来なければ知ることができなかった事、聴かなければ分からなかった事を知ることが出来ました。本当に素晴らしい貴重な体験が出来ました。

訪韓団に参加して本当に良かったです。3日間、ありがとうございました。

民主化の発展を担う若者たちと共に行動する

野崎正輝

私は、2025年度の日韓平和連帯行動を奈良県から参加する10名の仲間と共に、8・15韓国光復節にはじめて民衆側からの祭典に触れることになりました。

私の参加動機は、本年が日本のアジア侵略、とりわけ朝鮮半島を1910年韓国併合から1945年日本の敗戦まで35年間、日本の属国としてほしいままに支配・抑圧してきたこと、そして、本年が敗戦から80年を経過したのに、今だ日本人の朝鮮民族に対して本質的な反省・謝罪がなされていないこと。常に日本の立つ位置が80年前の支配・抑圧の思想から脱却出来ていない事に対して、今回、呼びかけに応じて、日本帝国から解放を勝ち取った朝鮮の側から8月15日を迎えて見よう。そこから、新たな景色が見えてくるかもしれないと思ったのが参加の動機です。

直前の2024年12月、尹錫悦（ユン・ソンヨル）大統領の戒厳令発令と、それに身体を張った民衆の阻止行動の息吹が、8・15で垣間見ることが出来るのではないか。また2025年5月～6月の大統領選挙による大衆の政治参加の行動が見られるのではないか。8・15本番のソウルの街は、期待にたがわず民主化の運動の流れは街を覆っていました。

早朝から、ソウルの街は民衆の熱気と大音量の音楽が流れ、民族舞踊・サムルノリの鐘と太鼓が街頭に鳴り響き、人びとは韓国旗を持ち、8・15を祝う団扇で扇ぎ街中を闊歩していた。

ソウル市庁前は、日本の侵略による残虐行為の写真やスローガンが展示されていた。また尹錫悦前大統領を支える右派のデモも大型バスや車を先頭に、韓国旗と星条旗を振りながら長いデモが行われていた。

しかし、それを上回る進歩連帯に結集する若い青年男女が、道路ほぼ全面を埋め尽くし、テントをはり無料の食事を提供して、午後7時の集会に待機していた。本大会に日本の連帯運動参加者も合流し、大音響の音楽と前面の大スクリーンに民主化闘争や日本が侵略した映像が映し出された。

テントには、パレスチナの写真が展示されていた。午後9時、サムルノリの音楽を先頭にデモが開始された。日本隊も車いすも利用しながら、隊列に合流。数回のポリスのデモ行進阻止の行動をはねのけデモを続行した。

日本の道路は、国家権力に支配されており、許可を超えた道路使用は弾圧の対象となる。本来、道路は民衆の物ではないのか。私は韓国のデモ行動に参加しながらそのように感じた。韓国の民主化闘争は街頭拔きに考えられない。弾圧が強まれば、街頭での表現はつぶされる。街頭での自由化は民主主義の秤になっているのではないか。

韓国の未来は、この若い青年層にかかっている。日本の朝鮮支配によって、南北が分断され80年を迎えた。南北統一が朝鮮民族の悲願である。何年かかっても朝鮮民族はこれを成し遂げなければならないと思う。これは朝鮮民族のみだけでなく、日本の国益に大いなる影響をもたらすことになる。

地勢学的に朝鮮は大陸の端の国である。日本は小さな島国である。朝鮮統一が実現すれば、朝鮮を通過して隣の中国そしてロシアを経由してヨーロッパまでの奥地に行ける。まさにシルクロードが再現できるのである。分断と対立は何も産まない。

今年7月の日本国参議院選挙で、「日本人ファースト」を掲げ国会議員を増やした参政党にみる民族排外主義は、今韓国で燃えている民主化運動に水をさすようなものである。我々は戦争を絶対に起こしてはならない。今、この機運をつぶすようにイスラエルは、パレスチナ人への民族浄化政策やロシアによるウクライナへの軍事支配に断固反対の意思表示を示さなければならないと思う。

今年の8・15集会で、李在明（イ・ジェミョン）大統領が演説で「過酷な日本の植民地支配に立ち向かいながらも、いつかは韓日両国が真の隣人になれるという希望を捨てなかった先烈たちの念願を続けて行かなければなりません」といっています。私達もこれからも熱い交流を深めて行く必要があります。

敗戦記念日であることを強く思った意義深い旅

佐野彰

今回の旅は、私にとって初めての訪韓でした。毎年、8月15日は日本のあの憤ましかで、厳かな雰囲気の中の式典の中で生きてきましたから、私の中では、あれが「終戦記念日」のスタンダードでした。しかし、初めて触れた韓国の8月15日はお祭りでした。民族衣装に身を包み、鐘を打ち鳴らし、笑顔で踊る民衆の姿を目の当たりにし、8月15日が「解放記念日」であることを改めて認識しました。韓国のそれを＋（プラス）の振れととらえるなら、日本の戦争で亡くなった方々を悼むそれは0（ゼロ）でしかありません。日本の侵略行為を反省し、アジアの国々に対して行ってきた蛮行を二度と繰り返さぬと誓うなら、日本のそれは、もっと－（マイナス）に触れていなければならない

のではないかと感じました。「敗戦記念日」であることを強く思う、今回の訪韓でした。意義深い旅になりました。

会場で聴いた「あなたのための行進曲」が耳から離れず、帰国してからもずっと聴いています。意味が分からずとも、音だけでなんとか口ずさめるようになりたいと歌詞を覚えている最中です。この歌詞をきっかけにして、韓国語の学習にとりかかろうと考えています。

若い青年学生の姿に 祖国の将来への希望を見た

趙基峰（チョウ・キボン）

昨年、8・15報告会を東海地協で開催し、大会参加者からの報告を受け、長年、祖国統一運動をして来た者として大会参加者の報告は内容も素晴らしく参加者の感動を聞く中で、やはり、その場所にいなければと強く思い、来年は必ず、8・15ソウル大会に行こうと決意しました。今回、参加して一番感じたのは、8・15本大会に若い青年学生たちが多数参加しており、また大会後のデモ行進の時、警察による妨害に対して、隊列の後にいた若い青年学生たちが先導車の指示で我々を追い越しながら警察と対峙している姿をみながら、わが祖国の将来に大きな希望を持ちました、本当に参加してよかったです。

また、個人的には、6年前亡くなった実姉の墓参りをすることができました。今回参加して、来年も必ず参加したいと思っています。

同志の皆さんコマッサムニダ（ありがとう）。

通訳の役得

李俊一（リ・チュニル）

今年も来る。8月が来る。裏方の私にとっては8月が近づくとし気が重くなるのが正直なところ。特に今年は日本の方も合わせると100名規模の大訪問団です。途方に暮れる思いでした。ですが、組織内若手（？）で構成した事務局メンバーの奮闘により大成功に終わったと思います。事務局の皆さん、チョンマル コマッサムニダ（本当にありがとうございました）！

個人的な話では今回も通訳を担当しました。大変でとても責任の重い仕事ですが、通訳は私にとって自分を成長させ、自分の世界を広げることができる大切な仕事でもあります。

青年時代から韓国の活動家、しかも「先生」や「巨人」と呼ばれる方々と身近に接することができたのは私にとって大きな経験です。

今回通訳して最も印象に残っているのは、はじめてお会いした進歩党のキム・ジェヨン常任代表です。私と同年代（おそらく代表が私より少し年下）で、進歩党の代表を努めており、先だっの尹錫悦（ユン・ソンヨル）を打倒した「光の革命」でも常に民衆の先頭に立って闘ってきた人です。私はキム代表が統合進歩党の青年代表として国会議員になったときから（一方的に）知っていますが、その後、朴槿恵（パク・クネ）政権

の弾圧によって統合進歩党は解散させられ、国会議員職も不当に剥奪されました。その後数年は政治の世界から退いていたと思いますが、全方位的な「従北バッシング」の中で、大変な苦勞をされたと思います。

訪問団1日目の最初のプログラム。韓国側が準備してくれた歓迎交流会の会場で、キム代表は入口で立ってわたしたちを出迎えてくれました。緊張の初対面（笑）。弾圧が過酷だったがゆえに、それを乗り越えてきたキム代表は相当エネルギーな方だろう、と想像していましたが、実際挨拶するととても物腰の柔らかい、優しそうな方でした。しかし、実際スピーチを聞いてみると、やはり最前線で闘い続けている活動家です。スピーチの中に、これまでの闘争の過酷さと、それを乗り越えてきた確固たる自信が垣間見えました。「わたしたち進歩党は、韓国の政党の中で唯一、民族自主と祖国統一を目指している政党です」「だからこそ弾圧されましたが、みんなの力でのりこえて、ここまで成長しました」。「毅然」という言葉がこれほど似合う人はいない、かっこいい！と同年代ながら感動しました。またひとり、通訳を通じて貴重な出会いを持つことができました。

「光の革命」では若い世代が闘いの先頭に立ち、民衆を牽引しました。今回の大会でも若い世代の躍動がとても目立ちました。運動圏においても確実に世代交代の波が来ています。私の年代はみな、組織の中心、運動の中心となることが期待されていますし、そうならなければならないと思います。

韓米、韓日首脳会談を終え、やはり民族自主は政権に任せきりではなく民族全体で勝ち取っていくものなのだと実感します。

今後の課題は、同志とともに「光の革命」を日本で実践すること。また来年、韓国の同志たちと堂々と語り合うため、自主・民主・統一運動を敢然と進めていきたいと思います。

風穴を開けるエネルギー

久保有美

目から鱗（うろこ）の今回の訪韓。自国を外側から見ると、あらためて自分の住む国の危うい現状を認識することができた旅となりました。

参加させていただいた平和デモは、決起集会から毎度のことながら大盛り上がりで、勢いと熱の高さに圧倒されました。なんといっても若い参加者（学生さん）の多いこと！日本とは大違いです。壇上に立つみなさんのスピーチも堂々としており、発言力の高さに思わず傍にいた娘たちと比べてしまいました。今回娘たちを伴ったのは、この違いを肌で感じてほしいという思いがありました。

日本の特に若者たちってSNSではなにかとつぶつぶ（つぶや）いてはいますが、人前で正々堂々と訴えることを、ダサいとか、スマートじゃないとか思っていないですか。デモは一部の限られた人がやるもので、関わらずに生きることがうまく世間をわたるコツ、と考えているような、そこを危ういなと感じます。

そもそも日本の学校では意見は封じ込められがちで、学生運動は押さえ込まれ、これでは声をあげて何かを変えていく、という気概なんて育ちっこないでしょう。最近ドラマでこんなセリフを耳にしました。「我が心のままに、わがままに生きることが自由に生きる事」。つまりは、嫌なものはいや、こんな世の中はおかしいと訴えることが、自分たちの国や未来を変えて行き、心のままに生きられるということ、それが自由なのではないかと思うのです。一見自由に暮らしていると見える日本の私たちですが、物価は高くなり、自然は奪われ、社会のシステムもいいように変えられていく、大変危険な状態に追いやられつつあるのではないのでしょうか。自分の国に危機感をもち、現状を変えようとすることを恐れない気持ち、この気概をおのおの育てることが急務なのではないかと感じたのです。

今回のデモには警察からの妨害もあり、幾度となく行進が止められましたが、そのたびに若者たちが風穴を開けていく、突破口を開いていく姿に、韓国のパワーを見ました。誰もが声をあげることをおそれない個々のパワー。韓国はエネルギーに満ちたマンパワーで、理不尽や暴力に負けない社会、未来を築いていくことができるかもしれません。それに対して日本は……。これからどうなるのかな。

国民のパワーの圧倒的な差。今回はこの点を強く思い知らされました。これからの日本をつくっていく若者たちには、韓国で見られた人々がもつ熱量の高さをどうか備えていってほしいと強く願います。

2度目の韓国訪問

荒岡 壱星

2度目の訪韓になりました。前回よりもデモの雰囲気などを予想することができたので、より細かな発見をすることができました。

1日目の韓国の人たちとの晩さん会は、こんなにも日本からの参加者たちを歓迎して迎え入れてくれるのだとうれしい気持ちになり、韓国の人たちと身近な関係であると改めて感じました。

8月15日は、「戦争と女性の人権博物館」と「全泰吉（チョン・テイル）記念館」に行くことができました。学校では習わなかった日本軍「慰安婦」についての悲惨な過去や事実を知り、日本では歴史から消されて無かったことになっていることを知りました。日本が韓国にした非を認め、心から謝罪・賠償する必要があると思います。これらのことをしてから被害者の方々やその家族は苦しみから少しは解放されると思いました。このような過去を決して無かったことにはせず、過ちがあれば認め謝罪し、未来の人たちに決して同じようなことが起きないように事実を伝えることが本当に大切であると考えました。自分ができることは何かと考え、今回知った事実を伝えることや、自分により詳しく調べて知識をつけることだと思います。

全泰吉は、1970年11月13日に、23歳で「労働者は機械ではない」と叫んで焼身自殺を遂げたと知りました。当時の韓国の労働者への扱いのひどさや、人間としての権利とは何かを学びました。労働者は機械よりも扱いがひどく、とても過酷な生活を

強いられていました。それは違うと言った人たちは政府から弾圧され、労働者の地位や名誉は確立されなかった中で、全泰堯さんが自分を犠牲にして後世に託したという行動力や意志の強さに驚きましたが、とても勇気づけられました。

夕方から光復80年の市民集会に参加しました。一番前には空色のTシャツを着た若者がたくさんいました。舞台では若い女性がとてもパワフルに司会進行をしていましたし、若者たちが次々パフォーマンスをしていました。若い人たちの参加意欲の高さや、やる気がとても感じられて終始圧倒されていました。日本にはない若者の政治意識があると感じました。集会を終えてデモ行進をしました。警察とデモ隊との衝突も間近で見てドキドキしましたが、いい経験ができたと思っています。韓国の人々の平和への強い願いや思いを感じ、韓国のような団結して政府に立ち向かうという国民の度胸や意志を学ぶことが重要だと思います。

年齢も立場も違う方々と共に韓国で過ごして、様々なことを学び、自分にとっても良い刺激をたくさんもらいました。次も機会があれば是非参加したいと思います。

人のつよさ・やさしさに出会う

田中文子

私は、永久睦子さんと金昌五（キム・チャンオ）さんが企画してくださった「チンチャ・コリア（本当の韓国に出会う旅）」（2018年）で韓国と出会い直しました。大学闘争時代に学生でしたし、社会問題のひとつとして朝鮮問題を学んでいました。韓国を訪れたこともありましたが、けれども、その中に自分がない、というか、どこか自分事になっていなかったのだと思います。

チンチャ・コリアを通して、軍事独裁政権時代から平和・人権を闘ってこられた韓国の方々、在日コリアンの方々、その方々の人間性に触れて、私の断片的な知識、見ていた景色が断然変わったと感じました。

そして、8月15日の光復節の集会に参加するようになりました。真夏の暑さと自分の基礎体力の無さを考えると参加を躊躇（ちゅうちょ）する面もあるのですが、今回は「車椅子を準備しましたから」というあたたかな励ましもいただき参加しました。

集会前に案内してくださった「戦争と女性の人権博物館」「全泰堯（チョン・テイル）記念館」はいずれもわが身に突き刺さる問題提起でした。日本軍「慰安婦」＝日本軍性奴隷制問題は逃れようもなく日本の問題ですし、全泰堯青年が命を捧げて問題提起した韓国の劣悪な労働問題は、日本の高度経済成長を支えてきたという日本と表裏一体の問題でしょう。でも「あなたたち日本人は」という攻撃・否定に晒（さら）されるのではなく、いっしょに闘おうという連帯のメッセージに包まれるのです。それは一朝一夕にできた関係ではなく、これまで日韓で闘ってこられた方々が紡（つむ）いでこられた信頼関係の中でこそだと思いました。

「光復80年 平和・主権・歴史正義実現 汎市民大会」は、若いパワーを感じました。その中に、「チンチャ・コリア」でお出会いした闘士（皆さん、とても穏やかな佇（たたず）まいなのですが、「闘士」と呼ばせていただきたい）の方々が若者たちを見守

るように参加されている姿を拝見して胸が熱くなりました。私もこうした関係を少しずつでも広げていけるよう努力したいと思いました。

この集会を準備、お世話してくださった方々に感謝いたします。この集会に参加された方々との出会いにも感謝いたします。ありがとうございました。

8月15日にソウルで考えたこと

井手窪啓一

戦後80年は、朝鮮半島にとって植民地からの解放、すなわち光復80周年です。その今年、8月14日から16日まで、連帯ユニオンや全港湾大阪支部のみなさんが世話役を務める「日韓平和連帯」の一員として、ソウルを訪問しました。

14日夜には訪韓団の歓迎交流会が開かれ、15日は「戦争と女性の人権博物館」と労働運動家「全泰壹（チョン・テイル）記念館」を訪れ、館長や専門員の方から詳細な説明を受けました。

15日夕方から、南大門広場で開かれた光復80周年の市民集会に参加しました。音楽も映像も工夫された参加者を飽（あ）きさせない大変楽しいものでした。

集会冒頭の団体旗の入場では、少女時代のあの『また巡り合った世界』の歌が流れてきました。尹錫悦（ユン・ソンヨル）大統領弾劾集会で若い女性たちが、応援棒を振りながら歌った歌です。動画では何度も見ましたが、実際の集会場で聞いて鳥肌が立ちました。

また、何万人かが参加した集会は、本当に若い人の参加が多いことに目を見張りました。集会終了後のデモは、行く手を封鎖しデモを阻止しようという警官隊と脇道を通って規制をすり抜けようとするデモ隊の追いかっこの大通り全体で展開されて、ともかくわくわくして面白かったです。

しかし、やはり考えこまざるをえませんでした。集会参加者に配られたプラカードには「歴史正義、平和主権実現」「トランプ収奪阻止」の文字が大きく印刷されていました。隣に座っていた大学生の集団のTシャツの背中には、「トランプ経済安保収奪反対！内乱勢力清算！」の文字がありました。

つまり、光復80年にして、歴史正義が実現していないという当然の認識、平和主権が実現していないという認識が集会の基調としてあります。いうまでもなく、歴史正義とは、日本軍「慰安婦」問題や強制動員問題をはじめとする日本の植民地支配の暴虐や収奪がいまだに一切総括・清算されていないことを指します。

私たち日本人こそが、この課題を必ず解決していかなければなりません。日本からの参加者を、デモの最先頭で歩かせてくれた韓国参加者の思いに答える意味でも。

日韓平和連帯8・15訪問団に参加して

大森正子

韓国に行くたびに、「ああ、またも言葉がわからない、ハングル文字も読めない」という大きな壁を感じています。不勉強のままの参加が心苦しいです。

訪問団のお世話をしてくださった役員の方々、私と同じ4班のみなさまに心から感謝とお礼を申し上げます。中村愛様には韓国に降り立った時から言葉に尽くせないほどお世話になりました。みなさまの温かな声掛けと笑顔が韓国の人びととどこかつながっているような至福の3日間でした。言葉は生きる力になりますね。

ソウルの繁華街は、屋台も市場も活気に満ちて人であふれていました。「光復80年・平和・主権・歴史正義実現汎市民大会」感動の渦の中での出会い。意気揚々と人びとが隊列をくんで、広場を埋め尽くす熱気に圧倒されました。数えきれない旗の軍団に、民衆が自ら勝ち取った解放の喜びを音楽に、ステージにあふれる若々しい声に、主権意識の高揚を感じました。歩道の縁石に腰かけていると、私ぐらいの年齢の女性が目の前に座っていて、私と目が会った時、何か声をかけてくださいました。

「・・・・・・??」その時「アンニョンハセヨ」・・「アンニョンハシムニカ・・・・」言葉が詰まってははっきり言えませんでした。その方はご自分の袋の中から、お菓子とペットボトルの水を何本も渡してくださいました。「ありがとうございます」と日本語で話したけれど、その方には通じたのか？また袋から缶ジュースを差し出されました。「カムサハムニダ（ありがとうございます）」という言葉もあやふやで恐縮してしまいました。手を合わせてお礼を伝えたら、ニコニコされました。次々ステージには熱いメッセージと音楽が夕闇を照らしていました。気が付いた時、私たちに差し入れをしてくださった女性はもう席を立たれていました。心がホカホカ、胸にじいんとくるものがありました。さよならの挨拶をする間もなく。ああ、残念、言葉が話せたらお礼をきちんと言えたのに。どうかお元気でと言えたのに。言葉は通じなかったけれど気持ちは通えたかな？笑顔いっぱいの人。

日本の植民地政策に苦しめられた朝鮮半島の人びとの想いが未来をつくるのだと強く感じられた光復節でした。「自主平和統一大会」に参加して、韓国民衆の弾圧を跳ね返す信念を見た夜でした

「全泰堯（チョン・テイル）記念館」では命を賭けて労働運動を闘った青年の生涯に胸を打たれました。女性差別の厳しい時代を切り開いた闘いは今に繋がっています。

「戦争と女性の人権博物館」を訪れました。戦時性暴力に貶（おとし）められた女性たちの悲痛な叫びを感じながら、これから日本政府が取り組まなければならない戦後補償の問題だと思いました。「なかったことにできない」深い謝罪がいります。戦争準備を着々と進めている日本政府は、人権蹂躪をどう考えているのか、黄色の蝶に思いを込めて壁面に貼りました。人間らしく生きたいです。合掌

尹錫悦罷免を実現した闘いの現場で

崔誠一（チェ・ソンイル）

私は今回3年ぶりにソウルを訪問しました。ソウルにはもう何回も訪問していますが、毎回出発する前日は不安と緊張感が漂（ただよ）います。しかし毎回、ソウルに到着して一晩寝た後は「私は韓国人！」という自信に満ち溢れている自分がいます。

15日の午前中は全泰堯（チョン・テイル）記念館を訪問、全泰堯烈士と李小仙（イ・ソソン）オモニの闘いと生き様を学びました。訪問後、昼食に行く途中、一緒に参加していた日本人の方が「全泰堯さんにも初恋があったのね」との感想を聞き、自分もそれまでの「闘う闘志、全泰堯烈士」というイメージから「全泰堯烈士もやはり同じ人間」とその時に感じました。

15日の夕方、本番の「光復80年 平和・主権・歴史正義実現汎市民大会」が開かれました。大会でとても印象的だったのは、開会直後の数えきれないほどの各団体の旗の入場でした。BGMにのって大会場に入場する旗！旗！旗！何とも爽快で素晴らしかったです。

そして汎市民大会が進む中、昨年末から今年の春まで行われた尹錫悦（ユン・ソンヨル）罷免を求める市民大会は「このように進められたんだな。今、私はその現場にいるんだ」と熱いものを感じました。大会後の大行進が午後9時から始まるのには驚きでした（日本では許可が出ないでしょう）。

韓国で活動している諸先輩、仲間も元気で暖かく迎えてくれました。感謝します。今回の汎市民大会をはじめ訪韓した経験を活かしながら活動していきたいと思います。

韓国民衆の気概と熱量を実感できた

中山茂

参観も素晴らしい体験だったが、何と言っても汎市民大会のあの感動は、一生忘れない。あの人数には驚いた。長時間座り続けていた民主労総の労働者と学生達。民主労総は8月5日の記者会見で「米国の経済・安保収奪を阻止し、韓米合同軍事演習を中止させるために、8月15日に大規模な全国労働者大会を開催する」と述べていた。しかし、18日から韓米軍事演習は始まった。

会場では、学生もスローガンを叫んでいた。おそろいのTシャツの背中には、「大学生平和の実践団」と書かれていたそう。それぞれ地域名も書かれていた。午後7時から汎市民大会が始まったが、団体旗を持った集団が、座り込んだ中を行進してきた。数百人はいたと思う。隣の学生が時折スローガンを叫び、アメリカを批判し、内乱勢力の清算を叫んでいることはかすかに分かった。

そして、いよいよデモの出発だ。午後9時に肅々（しゅくしゅく）とデモ行進は始まった。しかし、途中、なかなか進まない。最先頭の私たちは何度も止まった。若いスタッフが、私を日本からの団と思ったのか、スマホの自動翻訳機能を使い、「警察車両が行進を妨害してデモが進めない」と言ってきた。その間「平和デモを保障せよ」のシュプレヒコールが繰り返された。

その直後、指揮者が「パトカーの前に出よ」と叫んだ。指揮に従い、私達は必死に走った。私も全力疾走した。

私達の横を、学生・青年たちが怒涛のように走り去っていった。次々と新たな集団が突き抜ける。警察の阻止にあっても、その後の集団が迂回して前に突き進み、警察の壁にぶち当たっていく。見事なその連係プレーを見ながら感動し感心もした。

9時15分くらいからデモ行進は遅々として進まなくなり、あの「攻防」があり、デモが動き出したのは10時15分頃だった。訪韓団は、それを見届けデモから離れた。

最後のあのデモが今回の汎市民大会を体現していたと思う。組織性、規律性、そして実践力。素晴らしい訪韓活動でした。皆さんに感謝したい。

「光復80年 平和・主権・歴史正義実現 汎市民大会」に参加して

小林勝彦

8月14日から16日にかけて、韓国ソウルで開催された「光復80年 平和・主権・歴史正義実現 汎市民大会」に日韓平和連帯の一員として参加した。私自身、初めての裏方で支える立場での訪韓であった。

今年は、光復80年と言う節目として日韓平和連帯は48名を訪問団として参加した。訪問団には10歳から92歳までの、労働組合、市民団体、一般市民などが呼びかけに賛同して集まった。団長は全日建の西山氏、秘書長は全港灣の横山氏が務め、1年をかけての取り組みであった。

これだけの人数を事故無く安全にまとめるには、これまでにない苦労があった。飛行機やホテルの手配などで旅行代理店との幾度もの打ち合わせ、大型バスなどの移動手段の予約や調整、車いすの手配、なによりパスポートや住所などのチェックには何度も確認作業に時間がかかった。また、4班に分けて事前に班長同士の意見調整なども取り入れた。

今回の訪韓も8・15あるあるで、飛行機の遅延などから、楽しみにしていた民主化運動記念館の視察は中止となった。ホテル到着時は、どこか観光の気分も若干あり気が少し緩んでいた。しかし、夕方から行われた韓国進歩連帯が開催した歓迎交流会で1年ぶりに再会した韓統連訪問団や韓国進歩連帯のハン・チュンモクさんと再会した時には一気に気分が高まった。交流会はライブハウスを借り切って少し狭苦しく感じたが、それもまた味がある手作り感満載の良い交流の場であった。

翌15日は、A班・B班に分かれ「全泰堓（チョン・テイル）記念館」と「戦争と女性の人権博物館」のオブショナルツアーでA班は午前、午後とも決行出来たが、B班は移動手段にトラブルがあり、午後からの「戦争と女性の人権博物館」のツアーが中止となった。その後、南大門にて「光復80年 平和・主権・歴史正義実現汎市民大会」会場で日韓平和連帯48名と韓統連51名が集結し、恒例の統一ビビンバを食し集会に参加した。

最後に、韓国の集会は大きな道路を封鎖して行う。この事にも驚かされるが、参加者に若者が多く言葉がわからなくても熱気が伝わってくる。また、ステージ上でのパフォーマンスも素晴らしく参加者の気分を盛り上げている。

全港灣は青年部員2名を参加させた。おそらく彼らにとってもいい経験だっただろう。その経験が日本の運動に展開されることを期待して、今後も支え役に徹しようと思った訪韓だった。

独裁者と闘い続けてきた民衆こそが真の平和運動家

車有悟（チャ・ユオ）

今回の訪韓は光復節80周年ということで参加しました。面白かったのは、15日のデモの後、韓統連大阪本部の金昌範（キム・チャンボム）代表とそのお知り合いたちと居酒屋に入ったときでした。韓国で日本語で演劇をしているという劇団ディレクターのユンジンさんという方が話しかけてきました。そのお母さんも一緒にいました。「どうして日本語を話す人が光復節にいるのか」「どうして黄色の服を着ているのか」「私たちは、“私たちのクラスは日本語だ”という劇をしていて、最後に韓国の料理を出したらイルボンサラム（日本人）がすごく満足していた」と語っていました。あまり踏み込んだ話はしませんでした。解放80周年にいい出会いだったと思いました。

この光復節80周年いろんなことがありました。行きの飛行機が先に行ってしまったので最後の便を予約したら、仁川国際空港で韓青の後輩二人と合流することになった。1日目の結団式を欠席しただけでなく、2日目のオプションツアーでも宿泊している鐘路4街から鐘路3街までの距離なのに、歩いて行ったら逆方向の東大門で、腹が立って「帰ります」とLINEをしてふてくされていたら、昔の韓青委員長が家族で向かいから歩いてきて「誰かと思ったんだよ。向こうから黄色いシャツ着ている人が来るからさ。うちら以外にいないでしょ」と言われ、「はい、はぐれました」と返答し、頭を冷やそうとおしゃれなカフェに行きました。訪韓団と合流して写真撮影、友達の家族と再会。楽しかったです。それで全部がよくなりました。

そしていよいよ汎市民大会会場へ。なんとモンダンヨンピルの方が！みんなと統一ピンパを食べて、だんだん歩きたくなり、ふらっと歩いたりすると「すこし早いですが皆さんこちらへ」と言われて移動。司会者の名司会ぶりがすごい！！すごいいい声。居心地のよさ。行進も政府の行事と重なって途中で止まったりしましたが、日本でデモをするとピリピリ感がありますが、韓国はそんなことはありませんでした。

2日目も終わり帰り仕度へ。解放から80年たち、恨（ハン）の感情はまだまだあるのかと思いましたが「日本とは仲良くしたい」と言っていた人もいましたし、「パンチョッパリ（半日本人）」と言う人もいませんでした。

2000年頃と違って、コピー商品を日本人に売りつける人は見かけなくなり、日本のセブンイレブンが韓国にあるのに驚きました。そして大韓民国において独裁者と闘い続けてきた民衆こそが、真の平和活動家であると感じました。

光復節で緊張がとけた瞬間の解放感は最高でした。日本で外国人扱いを受けると苦しくなったりしますが、祖国で歓迎されて良かったです。お盆の暑いときに少し涼しい祖国で解放を祝えて良かったです。また訪韓したいです。KTXで釜山に行くのが夢の一つです。楽しい祖国旅でした。

朝鮮民族として血のたぎる熱い思い

柳隆範（ユ・ユンボム）

2022年に始めて参加して韓国人として大感動しました。昨年は残念ながら諸事情で行けず、今回もギリギリまで参加を悩んでいましたけど、本当に参加して良かったです。胸の奥に有る韓国人、朝鮮民族としての血がたぎる熱い思いが噴き出してきて、本当に今まで68年間、生きて来て良かったです。

初日の歓迎会から翌日のメインイベントまで本国の各団体の方々の平和、民主化&自由を求めるエネルギーに感服し、死ぬまで韓国人として堂々と生きたいと思いました。

韓統連の幹部の方はもちろん、韓青及び共に活動する多くの日本の方々にあらためて感謝、感謝の気持ちをお伝えして私の感想文とさせていただきます。

やさしさにつつまれた旅

井上泰子

これまでTV等で、ソウルの広場に集まり、ろうそくやアピール文を掲げた多くの人々を見て、ものすごいエネルギーを感じていました。今回、そのエネルギーあふれる場に参加できたことはとてもうれしく、そして貴重な体験となりました。

日本をはじめ世界全体が自国主義的な方向への動きを強める中で、たくさんの市民が参加している集会を目の当たりにしたとき、民主主義ってこういうものだと感じたのです。

今回の旅は、多くの“やさしさ”にあふれ私の心を満たしてくれた旅だったと感じます。初日の交流会では、あたたかく、やさしく受け入れてくださり、おいしいものいっぱいいただきました。韓統連の活動の幅の広さを知り、その延長にあるつながりのすごさを感じました。私がこの交流会に参加しているということがその証です！

「全泰壹（チョン・テイル）記念館」の見学は衝撃の学びになりました。私は恥ずかしながら全泰壹のことを知りませんでした。少女たちの過酷な労働環境を見て、全泰壹は労働に関する法律が存在することを知り学び、雇い主や国に対して労働環境の改善を求めるもまったく改善されることなく、最終的に抗議の焼身自殺を図るという衝撃的な生きざまを知りました。若くして命を絶つという悲しい結末ではありながらも、全泰壹の少女たちへの人としての愛情とやさしさ、そして強さが強烈に伝わってきました。

なぜそこまでできるのか、人権を大切にするという活動を長年続けている自分は、命を懸けるほどの闘いができているかと自問が続きました。記念館の方の想いのこもった丁寧な説明と加藤さんの的確な通訳によって、全泰壹の想いがストレートに伝わってきて胸がいっぱいになった見学となりました。

集会では、組合の旗を掲げ入場してくる若い人たちを見たとき胸が熱くなりました。日本の30年40年前に自分が参加していたメーデーを思い起こしました。“あんなに熱くなれたことがあったのに”と今の日本の現状を憂（うれ）とともに、韓国での労働運動の熱を感じて、日本では衰退している（と私は感じています）組合運動と比べてしまいました。日本はこれからどうなっていくのだろう！

デモ行進では、突然「走れー！！」という叫びの中で、何事かと前方を見ると、私たちの歩く道を確保するために、多くの警察とぶつかりあっているリーダーたちの姿がありました。女性も男性も一緒に、警察権力に立ち向かう姿はすごいし、カッコいいし、やさしさを感じた瞬間でした。デモをするにあたって警察との事前の約束がありながら、警察側がそれを守らなかったのが原因だったとか。

民主主義は人を大切にすることなんだ、そこには強さとやさしさがあってこそだということ強く感じた旅でした。

最後に、仕事で多忙な中、旅の準備をしてくださった西山さん、横山さん、そして韓国との連絡調整などさまざまな手配をしてくださった韓統連のみなさん、本当にありがとうございました。たくさん的人数を引率することはたいへんだったと思います。いつも、やさしく、あたたかく私たちの安全を気にしながら引率してくださり感謝しかありません。ほんとうに多くのやさしさをいただいた旅でした。

そして、一緒に参加したメンバーのみなさん、ありがとうございました。十分に話ができなかった方々とも、これからの平和連帯の活動の中で知り合っていけたらうれしいです。

熱い濃い3日間

荒岡誠二

3日間の感想を一言で言うと、題名にもした通り「熱い濃い訪韓」でした。参加することが決まってから、待ち遠しく過ごした日々でした。その中で自分なりに光復80年を韓国で迎えるにあたり、日本ではあまり語られないことが多いとも聞いていたので、自分なりに韓国映画を観たり、調べたりして訪韓に向けて準備しました（つもり）。

3日間とはとにかく熱い濃い時間でした。デモ行進での我がチーム以外の熱量もすごく感じ、日本では味わえない空気感でした。韓国の若い方々の熱量もとても感じました。日本でも若い方々が積極的に行動できるよう考え続けて行動していきたいと思います。

戦争と女性の人権博物館での展示内容、館長のお話はとても深く心に残りました。思い返せば日本軍「慰安婦」のことは、いつ学んだかわからず、なんとなく単語として知っている程度でした。資料と説明を見て聴いて、胸が痛かったです。このことを日本ではちゃんと教えていない（伝えてない）し、国としてもちゃんと認めていないし、謝罪していない事実があることにも憤りを感じました。

自分にこれから何ができるか、何をしなければならないかを考えながら行動していきます。とても熱い濃い3日間でした。ありがとうございました。

2度目の訪韓

荒岡咲歩

今回、2年ぶりに訪韓する機会をいただきました。2度の訪問を通して、日本が朝鮮に対してどのような過ちを犯してきたのかを、改めて深く考えることができました。特に、戦争と女性の人権博物館の壁に刻まれていた人々の思いが心に強く残っています。

これからは、朝鮮との関係についてより深く学び、考えていくことが大切だと感じました。また、多くの方々と交流できたことも、とても貴重な経験となりました。ぜひまた参加させていただきたいです。ありがとうございました。

8・15光復節 集会そしてデモ まるで夏フェス

河原和子

「8月15日、韓国に行かへん?」。映画を観てからの喫茶店で突然の田中さん（子ども情報研究センター）からの言葉に、「行きたい!!」と即座に返事をしてしまった。

私は7年前に初めて韓国に行き、仁川や群山で日帝時代の日本の家屋や寺、日帝が敷いた線路跡、群山の歴史博物館での植民地時代の韓国の展示も見た。高校生の頃、部落研で在日問題も学び、仕事を始めて在日のオモニの識字教室にも関わっていたこともあり、在日の友だちも何人かいて、4・3事件の慰霊祭に統国寺にも連れて行ってもらった。一応、韓国と日本の関係も知っている。だからこそ日本から解放されたその日の韓国に行ってみたかった。が、8月15日の韓国に気楽には行けなかった。しかし、今回は信頼できる「こじょうけん（子ども情報研究センター）」の仲間が一緒。日本との重い気持ちも話せる、独りじゃない。行こうと思った。大腿骨を骨折して1年余り、出発までリハビリに専念して、その日を迎えられた。

8・15の韓国の会場は、まるでテレビで見た「夏フェス」だった。若い人たちがたくさん集まり中心にいることに驚いた。あの戒厳令を阻止した力に納得ができた。主催者から私たち日本からの参加者の紹介もしてもらい、周りの韓国の人たちから拍手され、飴ちゃんやお菓子、ペットボトルのお水もいただいた。涙が出そうなくらい嬉しかった。

会場は、まるで文化祭のようなたくさんのテントのブース。その中の「慰安婦」を支援している若者のブースに石打さんが誘ってくれた。そのブースの彼女たちに、日本軍「慰安婦」にされたハルモニが主人公の韓国映画の『雪道』（Amazonプライムで観ることができます）と、韓国・中国・日本の共同で出版された日本軍「慰安婦」の絵本『花ばあば』（出版社ころから）を紹介できたことは、格別にうれしかった。何より、それらを韓国語に翻訳してくれた中村愛さんのお陰。感謝、感謝、感謝。

そして、デモ。パレードのような、あのシールズのデモの何倍もの楽しさ。圧巻はデモを止めようとする警察との攻防。

車からの若者の「平和的なデモを保証せよ」（崔さんに翻訳してもらった）のコールが続く。私が感動したのは、若者だけでなく年配の男性が二人、警察隊に向かって一所懸命に訴えている姿だった。日本ではシールズの若者だけだったように思うし、応援する

どころか安保運動や労働運動していた「大人」が、シールズのそれを、甘いとかカッコだけとか批判していた。私はそんな人に腹を立てるだけだった。しかし、韓国は違った。若者だけかと思っていた集会やデモに、ちゃんと年配の「大人」も一緒だった。共に活動していた。国が南北に分断され、徴兵制度もある韓国の平和への強い想いを感じた。

そんなすばらしい力の運動のデモに警察隊は退いた。国家権力に勝った!!「我々は勝利した」と、コールする若者と一緒に歓喜した。

夜の8時から始まったデモは10時をすっかり越えていた。私たちは、そのデモを見送りホテルに帰った。汗でベタベタだったけど、清々しい気持ちでホテルまで辿りつけ、ぐっすり眠れた。

まさにお祭り!! 光復節の、平和であることの真剣な楽しさを存分に味わえた。日本でも平和であることに行動していきたい。

2泊3日の濃厚な旅。韓統連のみなさん、一緒に訪韓できたみなさん、ありがとうございました。

刺激に満ちた「チーム広島」としての行動

崔保（チェ・ボウ）

「飛行機に乗り遅れた」と8月13日の午後1時26分にチーム広島のリーダー尹康彦（ユン・ガンオン）氏にLINEを入れた。折り返しの電話があり「どうしたんですか」「時間を勘違いした」「分かりました。後はこちらで何とかします」と電話は切れた。しばらく後に「夕方のチケットを取り直しました」。搭乗前に「韓国でスマホを使う準備は?」「海外で使う準備は?」「ホテルはドゥーミーインサドンです」「608号室」「地下鉄はチョンノ3街」と地図がLINEされてくる。「ソウル駅からの行き方も書いて」と返信する。

18時発の飛行機に乗った。出発は30分遅れとなった。飛行機に乗りスマホで音楽を聴いていたら突然切れた。「こういうことか」とやっと悟った。仁川空港に着き荷物をなんとか受け取り、さてスマホを見るとスマホは使えない。案内版のハングルを読みながらソウル駅に向かう。地下鉄に乗りチョンノ3街10番出口を出る。尹康彦氏に送ってもらった地図を頼りに歩く。それらしきホテルを見つけ、フロントで608号室を借りていると告げ「オオツキ」と名前を言うが「ない」といわれる。「ホテルの名前は、ドゥーミーインサドン」というと「ここではない」と言われ、PCで検索しプリントを一枚渡された。プリントを見ながら歩きやっとホテルのフロントについた。日本人スタッフがスマホをホテルのWifiにつないでくれた。尹康彦リーダーに電話をしたら「608号室に行ってください」と、608号室に行きドアを開けるとチーム広島のメンバーが車座で座っていた。メンバーの金利明（キム・イミョン）氏が「彼が獄中に入っていた崔保氏です」と紹介されたが、いったいどんな人物に仕立てられていたのだろうか。探しに行っていた尹康彦リーダーも帰ってきて乾杯と自己紹介大会となりました。正直

ハングルが読めて本当に良かったと思いました。でなければたどり着けなかっただろうと。

チーム広島は、14日からメンバーの金利明氏がコーディネートした盛り沢山の踏査があった。

- 14日 午前 植民地歴史博物館（広島企画）
午後 民主化運動記念館（広島企画）
- 15日 午前 戦争と女性の人権博物館（全体企画）
午後 美しい青年 全泰一記念館（全体企画）
夕方から夜 本大会・デモ
- 16日 午前 解団式
盧武鉉市民センター（広島企画、以下すべて）
午後 西大門刑務所歴史館
夕方 漢江（ハンガン）クルージング
旧日本大使館前：少女像
- 17日 午後 安重根（アン・ジュングン）義士記念館
大韓民国歴史博物館

強く印象に残ったのは、16日午後にチーム広島が招待された「クルージング&サムギョプサル」の夕食会。8月6日に広島市の原爆慰霊祭に招待された韓国側が、そのお礼に開催してくれたもので、招待されたのは、チームひろしまとアメリカの代表団。会場に着いた人からクルージングを2班に分かれて行い、その後で夕食会の開始。夕食会では各地の自己紹介とノレの披露。

ここは韓国進歩連帯の支援者の店を貸し切りで行われた。この会の韓国側の中心は80年代民主化運動の闘志で、彼らは「同窓会合唱団」をつくっており、力強く歌われたノレ（歌）は「反戦反核歌」「真の労働者」だった。久々に歌ったなあ。日本に帰っても鼻歌が出るぐらいだ。

チーム広島での行動は非常に刺激に満ちたものだった。一緒に行動した日本の友人たち4名は十分にハングルが読める者はいなくて、一緒に歩き説明をする必要があった。すべては説明できなかったが、重要と思われることや知っていてもらいたいことを説明した。

17日に行った大韓民国歴史博物館では、太極旗をテーマにしながら近現代から現在までを展示していた。1987年大統領選挙の直接選挙制の復活は伝えていたが、以降の民主化の流れの中で訪北した人の数が数字で示され莫大に増えていたが、金剛山観光のことは表記されていなかったのも、彼らに数字の裏にある事実を説明した。このように事実を伝えないことで歴史は歪められていくのでしょうか。また西大門刑務所歴史館では監獄の個室に独立運動家・民主化闘争家の一人一人が展示で説明されていた。建物には誰もが知っている独立運動家の巨大な写真が掲げられていた。

ぜひ見てもらいたい人はたくさんいるが、今回は民青連（民主化運動青年連合）を作り、のちに国会議員にもなった金槿泰（キム・グンテ）氏について説明した。統一紡績

労働者の闘いの写真もあった。ぜひ知ってもらいたくて、あらゆる知識と情報を呼び覚まし一生懸命説明した。

本大会でのスローガンの中に「自主統一」「国家保安法撤廃」が入っており、盧武鉉（ノ・ムヒョン）大統領が職責を追われたこの文言が市民大会のスローガンになったのかと感慨深かった。

今回の訪韓は大変意義深いものとなった。また訪れられるよう頑張りたい。

初めての韓国への旅を終えて

田中美穂

このたびの韓国での旅は、本当に素晴らしい時間となりました。貴重な機会を与えてくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

今回の旅で自分の無知を改めて痛感いたしました。以前より、私が日々取り組む核兵器廃絶の運動は、植民地主義に抗うことであり、だからこそ日本の加害や責任について学び続けなければいけないと考えてきました。知識不足であることは重々自覚しておりましたが、いざ8・15の集会で大勢の方のスピーチを聞き、共に歩き、みなさんと言葉を交わし、実際に日帝時代の建物に立ったとき、何が起こったかを知らないまま人生の大半を過ごしてきたことの恐ろしさ、そして加害の側に立つ者としての特権性をまざまざと感じました。植民地主義に抗うということの意味を深く考え、まだ不完全ながらも自分の言葉として発することが以前よりできるようになったのではないかと思います。

4日間の短い滞在の中で、たくさんの方と出会い目撃しました。広島チームで崔保（チェ・ボウ）さんと金利明（キム・イミョン）さんとご一緒できたことは大変嬉しく、また全国の韓統連の皆さまとお会いできたことで、その活動の歴史をより深く知ることができました。デモを牽引していた私よりもうんと若い方々の瞬発力には目を見張りました。最終日に韓国と米国で活躍するみなさんと交流できたことも大きかったです。歌の披露は本当に素晴らしかった！

人だけでなく、心に刻まれるたくさんの言葉とも出会いました。その中でも特に私の中に残っているのは以下の言葉たちです。

8・15の市民大会で「たとえ一日だけ生きるとしても、主権のある国に住みたい」と話した、名前は分からなかったのですが同世代の方の言葉。

李在明（イ・ジェミョン）政権に対して「牽制し、批判し、圧迫することをしなければいけない。外交において『期待』という言葉はない、それは屈服」「国民主権は大事、ただもっと大事なものは民族主権」という康宗憲（カン・ジョンソンホン）氏の言葉。「日章旗が下がった瞬間に、今度は星条旗が上がって、80年間支配し続けられている。命が尽きるその日までともに歩んでいきたい」とおっしゃったハン・チュンモク氏の言葉。これらを通じて、日本が朝鮮半島に振り翳した圧倒的暴力、そしてそれを都合よく削除し、見せかけの「平和」を謳ってきた日本の姿について、痛烈に考えさせられまし

た。帰国後、ニュースで耳にする「終戦」や「戦後80年」といった言葉にも、渡韓前以上にその軽さや浅はかさを強く感じています。

私が「歴史」として知っていた数少ない点が、まだ少しではあるのですが、前後に伸び、短い線が少し増えたような感覚を今持っています。これをさらに繋げて面にしていく、という必要性やその意味が確かに分かった気がします。そして重要なことに、「歴史」として認識してきた事柄を実際に生きてきた方々を目の前にし、それが今の社会や自分自身とも地続きであるということを、本当に当たり前なことではあるのですが、改めて教えていただきました。

これまで抑圧され、消されてきた痛みを、植民者である日本人の私が学び、伝え、行動していく使命があると改めて深く感じています。それは朝鮮半島にも、沖縄にも、ミャンマーにも、パレスチナにも繋がっていくと思います。

初めて訪れた朝鮮半島で、皆さまにとって大切な日をご一緒させていただけたことを大変光栄に思います。韓統連の皆さま、本当にありがとうございました。具体的な行動で応えてまいります。

心揺さぶられた2025・8・15

笠松玲子

今回、初めて参加しました。事前の学習会で知ることも多く、本当に一から学ぶところからのスタートでした。

過去のことでなく、自分が生まれ過ごしてきた期間にもあった事を知り、知らないままできたことを痛感しました。戦争と女性の人権博物館、全泰吉（チョン・テイル）記念館で見たこと聞いたことに言葉を失いました。と同時に人間のおぞましい部分を実感して暗澹（あんたん）たる気持ちになりました。

そして同じ日に光復80年の大会に参加したのですが、こんなにもたくさんの人達が一人ひとり声をあげている、それが連帯してうねりをあげている。その中にいて、熱気を身体で感じた時間でした。ああ、人間って、暗澹たる存在というだけでなく、世の中を変えていこうという強さを持った存在でもあるのだなと、心が揺さぶられました。

一日のうちに、いろんな感情に掻き乱され、帰国してしばらくの間も心が大きく波打った状態でした。日が過ぎて、今回の体験が、強い支えとして残っていると感じます。自分の中に開いた風穴をこれから少しずつ広げていきたいと思っています。

一緒に参加した皆さま、本当にありがとうございました。大きな体験をさせていただいたことに感謝いたします。

原爆80年 被爆80年 光復80年

尹康彦（ユン・ガンオン）

日帝植民地支配。家族を奪い、土地を奪い、言葉を奪い、人間の尊厳を奪い、命を奪い、私たち朝鮮民族からありとあらゆるものを奪い、多くの苦痛を与えたのです。

原爆80年。アメリカの原子爆弾による広島・長崎攻撃は戦争を終わらせるためではなく、対ソ連戦略によるものです。日本は天皇制維持のためにポツダム宣言の受諾を遅らせ、原爆無差別大量殺戮を招いた責任があります。

被爆80年。解放直前に広島・長崎の多くの朝鮮人が原爆によって被爆し犠牲になりました。広島で5万人が被爆し3万人が死亡、長崎で2万人が被爆し1万人が死亡したとされています。日本の敗戦により朝鮮が植民地支配から解放されましたが、広島・長崎の同胞は、解放・光復を喜びの中で迎えることはできませんでした。朝鮮人への厳しい差別・処遇に加え、被爆という二重三重の苦しみの中で生きること強いられてきたのです。

私たちは8月、広島で「広島原爆80年朝鮮人犠牲者追悼式」「朝鮮人被爆者問題講演会」を開催しました。韓国から追悼団が来日し、日本に住む同胞と多くの良心的日本人とともに、朝鮮人被爆者問題を考え、問題解決に向けた行動を提起し、朝鮮人犠牲者を追悼しました。

アメリカは原爆攻撃を謝罪しなければなりません。日本は招爆と植民地支配を謝罪しなければなりません。

光復80年。日本の敗戦と同時に私たちの祖国は南北に分断されました。本当の解放・光復は実現されていません。

2025年8月、ソウルで私たちはいくつかの記念館・博物館を訪れました。日帝の植民地支配から解放を求める闘い。女性の尊厳を守る闘い。軍事独裁政権と闘う人々。民主化を求める様々な闘い。人々を苦しめた監獄。多くのことを感じ取りました。私たち民族の苦しい時代と闘いは現在に受け継がれていると思います。

ソウルで開催された「光復80年 平和・主権・歴史正義実現 8.15汎市民大会」。その名の通り、今の課題が、平和・主権・歴史正義の実現です。そのためには、参加者一人一人の思いであり、民族の願いである祖国の自主統一を実現するための闘いに、繋（つな）げていかなければなりません。国内の闘いとの連携をより拡大していきながら広島で取り組むことが必要です。

多くの日本人とともに朝鮮半島・東アジアの平和のために取り組んでいきます。チーム広島はこれからも皆さんと一緒に考え、行動していきます。

訪韓を終えて思うこと

山下裕子

なぜ私は参加するのか。考えれば考えるほど、今回の訪韓は苦しいものでした。忙しさにかまけて、理由など問わなくても生きていける自分もいて、それは私が日本人で、差別する側で、乱用する力をもっているということ。このことに本当に気づいたのは恥ずかしながら今年です。

韓統連大阪主催のセミナーに参加し始めたのは8年前。2018年には「チンチャ・コリア（キャンドル市民革命の地を旅するツアー）」に参加しました。初日、韓忠穆（ハン・チュンモク）さんのご講演「キャンドル革命と韓国の民主化」を聞いて、私は「朝

鮮民主主義人民共和国がアメリカと対等な関係を実現するために、核・ミサイルを整備していることはやはり理解できない。平和は大きな犠牲の上に成り立つのだろうか」と発言しました。韓忠穆さんは、イラクやリビアのことも例に出して「強大国が弱小国を侵略する歴史の中で、弱小国がどのように国を守るのか、そのことを考えた上での非常に難しい決断だと思う」「最終的に朝鮮半島の完全な非核化と朝鮮半島の平和体制が確立できていると思っている」「日本は唯一の被爆国として、北の核の問題に敏感になるのは当然だけれど、アメリカ、ロシアなどすべての核の課題としてとらえなければならないと考えている」とお話をいただきました

またその時、永久睦子さんから、金昌五（キム・チャンオ）さんが大阪での講演で「核は絶対悪であるというだけで、北の核だけを批判するのは無責任ではないか」というお話をされてドキッとした。自分たちがどのように核で対決するのか、自分の問題に置き換えて、人間の愚かさを悲しむと同時に、誰とどう手をつないでアジアの平和を築いていく一つの力になれるのか、話し合っていかなければならないと思うと言われました。

この時のことが私の中にずっとあります。北を批判するということは、自分の中に植民地主義があるということです。このことを克服するには、どうしたらいいのか。歴史を学ぶ。みなさんの取り組みを知る。取り組みに参加する。話し合っていく。そして、差別、人権侵害を問う仕組みをつくろう！と声を挙げ、日本政府に言っていく動きに参加していく。出会ったみなさんと手をつなぎ、動きたいと思います。

戦争の無い平和な社会の実現に向けて

大村和子

1970年11月13日、23歳の青年全泰壹（チョン・テイル）さんは、ソウル平和市場前で勤労基準法の小冊子を手に自らの体に火を点け、「勤労基準法を遵守せよ！」「私たちは機械ではない！」「日曜日は休日にせよ！」「労働者たちを酷使するな！」と叫び、焼身自殺した。彼の生涯、実践、夢を展示している「全泰壹記念館」を見学した。

私が初めて韓国を訪れた1977年、或る韓国人学生の案内で平和市場を密かに訪れ、まだまだ労働条件は改善されず、狭い劣悪な環境の縫製工場で働く少女たちの姿、狭い廊下の片隅で洗面器の水で髪を洗いながら私に向けた一人の少女の笑顔、そして、全泰壹さんが焼身自殺した現場を目にしたことを思い出す。映画「美しい青年 全泰壹」（1995年制作）を韓国語教室の仲間と協力して脚本を翻訳し、映画上映会も催した。彼の志、行動は、その後の韓国民主化闘争、労働運動の礎となった。記念館の入口にある全泰壹さんの座像の傍に坐り、立像の手に触れ、彼の美しい心と夢を感じた。

日本軍「慰安婦」問題を伝え、問題の解決を目指すとともに、現在の世界の武力紛争地域における女性への暴力を根絶するための活動拠点ともなっている「戦争と女性の人権博物館」を見学した。チケットの裏面には、1991年8月14日、韓国で初めて日本軍「慰安婦」被害者であると名乗り出た金学順（キム・ハクスン）さんの写真と紹介

文が載っていた。裏面の写真と文は一日ごとに変わり、被害者一人ひとりの人生が紹介されるようになっていく。一つ一つの展示を見学し、被害者の苦難の人生に思いを馳（は）せる。

その後、今年2月に亡くなられた吉元玉（キル・ウォノック）ハルモニについての話を伺った。私は、2008年に67年振りに故郷であるピョンヤンを訪れた時のハルモニの笑顔、また、金福童（キム・ポクトン）ハルモニとともに度々来日され、朝鮮学校を訪れ、学生たちを励まされ、城北朝鮮初級学校の芸術発表会を参観され、子どもたちの歌や舞踊や演技に満面の笑顔で拍手されていた様子が今も思い出される。現在、韓国での生存者は6人となった。

今年は日本の敗戦から80年、しかし未だに日本は加害と向き合うことなく、責任は果たしてきていない。日本政府に公的謝罪と補償を求め、日本軍「慰安婦」被害者が願った戦争の無い平和な社会の実現に向けて努力しなければならないと強く思う。

「平和・主権・歴史正義の実現」「トランプ同盟収奪阻止」のプラカードを手に「光復80周年ソウル平和行事」に参加した。歌、踊り、楽器の演奏等ふんだんに盛り込まれ、また、学生、労働者、農民、進歩陣営、各地域、各階層から多くのアピールが続き、楽しさと真剣さが同時にあり、韓国民衆の希望と熱気が伝わってくる感動的な時間であった。

残り多いソウル訪問をお世話して下さった進歩連帯の方々、韓統連の皆様、そして共に行動して下さった仲間の方々に心より感謝申し上げます。

運動が生活することなのだ と励まされた8・15大会

森永雅世

8・15光復節に一緒に行かないかと誘われ、めったにない機会であり行ってみたいと思いました。尹錫悦（ユン・ソンヨル）大統領が非常戒厳令を出したとき、議員も全員一致で解除を要求、6時間で収束しました。いち早く動いたのが韓国の民衆でした。政治への監視、主体者意識を感じました。

2006年に、永久睦子さんから声掛けいただき、在日韓国民主統一連合大阪本部の金昌五（キム・チャンオ）さんのコーディネートでチンチャ・コリアツアーに参加したとき、水曜デモでハルモニに出会い、全泰壹（チョン・テイル）さんのお母さんの李小仙（イ・ソソン）オモニから血みどろの闘いの歴史をお聴きし、反米・反基地ロウソクデモの民衆の熱気も忘れられません。そのときから8・15にも行ってみたいと思いました。なかなか叶いませんでした。戦争と女性の人権博物館や、全泰壹記念館も楽しみでした。

8月15日、16時に大会会場に着くと、地下鉄の最寄り駅からどんどん人が出てこられ、警察の車や先導車両などで南大門前の道路はすでに埋め尽くされていました。前日に団結交流会&歓迎会を開いてくださった方たちが、アルミ箔で包んだ大きなピビンバおにぎりと統一旗のデザインがついた箱形の米粉蒸しパンをくださいました。17時になると大通りに座り込み、市民だ！平和・主権・歴史と書かれたスクリーンが映し出

され、本大会が始まりました。市民活動家のスピーチ、楽団の楽器演奏や歌や踊りなど、言葉はわかりませんが、参加者の喜びを共有し、熱気にあふれていました。近くにおられた息子さんと参加されていたオモニは、大村さんに声をかけてこられて、日本から来たことがわかると、よく来たと歓迎してくださいました。参加団体が旗を先頭にアピール、その数にも圧倒されました。

午後9時からデモ行進。韓国の労働団体が意気揚々と笑顔で進まれ、ついていきました。途中、機動隊に阻まれましたが、すぐさま抗議し突き進む姿にも民主化の本流を見る思いでした。

日本でも、臆することなく声を上げようと思いました。そのためにも、組合の強化と次世代への継承が欠かせません。運動が生活することなのだと思われました。

同行の皆さまには、それぞれを尊重いただき、ご配慮もいただいてとても居心地の良いツアーでした。深く感謝いたします。

韓国社会は冷めてない社会でした

白康喜（ペク・カンヒ）

今回の訪問団は非常に充実した内容でした。本大会以外にオプションツアーとして「美しい青年 全泰壹（チョン・テイル）記念館」と「戦争と女性の人権博物館」への参加がありました。いずれも初めての参観でとても良い経験となりました。内容については皆さんもご承知の通りだと思いますが、それを設置・運営していく人たちの熱気や血の滲むような努力を感じる事ができた事が大きな獲得物でした。

そして本大会での行進時、先導者の闘う姿勢、若者たちの行動力・突破力を見て、この冷めていない社会の原動力がそこにあるのだと実感しました。

普段わたしが暮らす「この地」の日常ではその熱量を感じる瞬間はなかなかありません。どこか冷めたような、斜に構えたようなモノの見方や行動が持てはやされる「私を取り巻く日常社会」から、遠くかけ離れた美しさがそこにはありました。

韓国滞在の最終日には、平和市場へ。その後、南営洞の民主化運動記念館に足を運びました。偶然にも記念館の前で金昌五（キム・チャンオ）副委員長に出会えたので、図々しくも館内をご案内いただきました。

この二つの場所を見て、さらに韓国が冷めていない社会であることを痛感しました。また同時に、社会が発展し続けている原動力がここにあるんだと確信しました。

このような時代になるためには、どんな境遇でも民衆が闘い続けることが必要で、まさにその軌跡を辿る事ができた有意義な訪問団参加でした。

民主化運動記念館は、ぜひまたみんなで行きたいですね。

祖国の大地にたたずみ 空を見上げる

金源道（キム・ウォンド）

光復節80年の日に、ソウルにたたずんだ感慨は一生忘れないだろう。80年は戦争と暴力とで窒息させられた大地に、民衆のまさに生と死をかけた闘いによって勝ち取ら

れたわが地であった。祖国から離れ生まれ育った身ではあるが、長く民主化と統一を求め続けた在日の一人として、祖国の地で闘い続けた人々、そしてこれからの時代を切り開く若者と、同じ地面にたたずんでいることが嬉しく、かけがえの無い時間でした。尹錫悦（ユン・ソンヨル）を倒した民衆と共に過ごす時間が恋しく、8月の暑さと共にその匂いが思い出されます。

本大会で隣にいる私より少し若いであろう女性の元気な姿と、たくましい声に「これからも共に、より良き韓国と朝鮮半島の統一を実現しましょう」と声をかけたい衝動にかられましたが、ハングルの問題と変なアジョシ（おじさん）と思われるのも女性に迷惑だと思い諦めましたが、3時間を超える広場とあの空のもとで出会えたことが良き記憶として今も残っています。

本大会の翌日は、南営洞対共分室の前庭に今年建てられた「民主化運動記念館」に行きました。解放後の韓国の歴史の全てが網羅されていると言っても過言ではなく、最新機器（プロジェクションマッピングなど）でその歴史が紹介されているので、分かりやすく見ていて飽きない作りにもなっています。行ったときは映像と役者とのコラボで光州から6月民衆闘争までが上演され、日々歴史の積み上げがされる韓国現代史とそれをしっかりと受け止める芸術家の心根を見た気がします。私にいつも勇気と学びをくれる韓国とその民衆、国民に感謝です。

2025・8・15訪韓レポート

横山貴安基

2025年8月14日～16日の3日間にかけて「光復80年 平和・主権・歴史正義実現汎市民大会」参加の為、訪韓してきました。

この度80周年ということで「日韓平和連帯と韓統連と合わせて総勢100名の団を形成して訪韓しよう！」を合言葉に準備を進めてきました。訪韓に至るまで何度も会議を設け、金昌五（キム・チャンオ）さんや康宗憲（カン・ジョンホン）さんを講師に招き学習会を開催し教養を深めました。また、参加者が何度も顔を合わせる度に親睦が深まり、各々の思いも共有されていきました。

8月14日、訪韓当日、日韓平和連帯組は朝から関西国際空港に集合し、汎市民大会参加時に着用するTシャツが配布され、実感が湧いてきた人も多かったと思います。予定より遅く飛行機が飛び立ったため仁川空港に到着が遅れ、本来参観予定であった「民主化運動記念館」へは行くことが出来なかったのは残念でした。

夕刻、現地の政党代表や議員や市民団体の方々との団結交流会が開催され、韓国の方々から国内情勢や集会に臨む決意などが述べられました。日韓平和連帯からは西山団長が決意を表明し、時間が許されるまで各々の思いや決意を述べ、また歌で想いを伝え、会場が一体となり大きな団結となりました。あれだけの大勢の人が入り食事をとれる場所となると大変ご苦労されたことでしょう。用意をしていただいた韓国の友人に感謝申し上げます。

2日目の日中「戦争と女性の人権博物館」と「全泰堯（チョン・テイル）記念館」を2班に分かれて参観しました。

いつの時代も戦争が起きると一番被害を受けるのは弱者、いわゆる女性や子供です。「戦争と女性の人権博物館」の参観では、そういった生の資料や声がまざまざと流されていて、特に私たち日本人は色々と考えられることとなりました。

「全泰堯（チョン・テイル）記念館」の参観では、当時の労働者にとって大変劣悪な環境下によって奴隷の如く扱われていたことが、全泰堯氏の運動、その末に焼身自殺という事件を契機に、今の時代が築けているのだと切に思います。私は「全港灣」という組織、労働組合の一員ですが、今回2名の青年を連れて行きましたが、ここでの教養は後に帰国してから話が出てくるくらい感銘を受けたようでした。

夕刻、集会会場わきに設置された多くのテントで「統一ピビンバ」が振舞われました。そしてついに「光復80年 平和・主権・歴史正義実現 汎市民大会」が19時より開催され、大変広く数百メートルもある道路を多くの人で埋め尽くし、各団体からのアピールによって参加者は拍手やシュプレヒコールを上げ、盛り上がりは最高潮に達しました。

21時よりデモ行進が始まり、途中現地警察からデモ行進の妨害が繰り返され、その度にデモ隊は合間を潜り抜け、デモ貫徹に向けて躍起となりました。後で聞いた話では、道路占有許可、いわゆるデモ申請は事前にされており、警察の妨害がいかに権力弾圧であるかを物語っていたことであるでしょう。

最後に、2日間の行動で感じたことは、国家権力に対して立ち向かい「国民が国を変えるのだ！」という気持ちが韓国国民には一人一人強い思いを持っていることです。汎市民大会では、青年層が多く参加しており、活気に満ちていました。なぜ韓国ではこのような大きな運動になるのか、それは韓国国民によって過去、国民の力で実践してきた経過からなる大きな自信であるに違いない、と私は考えます。日本国民も多くの人々がそのような気持ちで今の権力にまみれた社会に立ち向かい、私たちの後を生きる世代のため、安心して暮らせる社会を構築していかなくてはなりません。韓国の強大な運動の力を日本でどのように大きな運動の波を起こすのか、東アジアの平和、南北統一の実現といった大きな課題に立ち向かい考えていかなくてはなりません。80周年のこの年を境に、日韓平和連帯のこれからの運動について再度見つめ直す時かも、そのように実感しています。

この度、大きなトラブルもなく、無事に全員が元気に帰国できたことに対し、韓統連の皆様をはじめとする多くの方々に感謝申し上げて、日韓平和連帯を代表してのレポートといたします。ありがとうございました。

集会のスケールの大きさとデモのエネルギーに圧倒された

吉馴真一

「光復80年 平和・主権・歴史正義実現汎市民大会」に参加した日韓平和連帯訪韓団のみなさん、お疲れさまでした。今まで8・15大会には全港灣から何人か参加して

いますが、私自身は初めてです。集会のスケールの大きさ、そしてデモのエネルギーに圧倒されました。まず、見渡す限り参加者で、見物人は海外からの旅行者か仕事の人ぐらいに感じるほどの一体感でした。若者たちは自発的に臆することなく警察の進路を妨害するなど、表情豊かに駆け回って、見ているだけでは、うずうずしてくるほどのデモでした。これほどのパワーがあれば政治改革することも可能だと実感しました。日本では何故こうならないのか、それは権力に立ち向かうことや、そして勝利する経験のなさにあると強く感じます。

今回の体験をもとに労働組合の役員として、まずは若者たちとともに目の前の諸問題からコツコツと解決能力を高め勝利する喜びや感動の経験を一緒になって積み重ねてまいります。

初めての体験で、すごく刺激をもらえた

佐久原秀大

8月14日から16日まで、光復80周年のデモに参加させてもらいました。

他にも全泰堯（チョン・テイル）記念館に行ったり、色々な体験をさせてもらいました。どれも初めての体験で、すごく刺激をもらえたとし、すごくいい経験になりました。特にデモは見たこともない人数の人が集まり、まるでパレードのように若者が多く、デモ行進を楽しんでいました。

今回の経験を活かし、これからも頑張りたいと思いました。

歴史の重みと平和の尊さを改めて感じた

平澤悠磨

光復80年の節目に参加し、歴史の重みと平和の尊さを改めて感じました。過去を忘れず、未来へつなぐ責任を心に刻みました。

戦争と女性の人権博物館を訪れ、被害者の苦しみと尊厳を深く学びました。平和と人権を守る大切さを強く実感しました。

まだまだ勉強不足ですが色々と学んで行きたいと思います。

光復80年 韓統連母国訪問団に参加して

李鐵（イ・チョル）

2025年8月14日から16日まで、光復80年に際し8月15日夕刻から行われた「光復80年・平和・主権・歴史正義実現汎国民大会」に参加できたことは私の活動家人生で記憶に残る素晴らしい経験だった。

今回の母国訪問は14日午後仁川空港についてホテルで旅装を解いて、旧知の友人が活動拠点としている「植民地歴史博物館」訪問から始まった。訪問時の展示内容は、尹錫悦（ユン・ソンヨル）前大統領の内乱策動から始まった「光の革命」と称される韓国市民による内乱阻止と首謀者処罰を求める大きなうねりの中、市民がどのように闘った

のかを、集会・デモ参加者が持ち寄った手作りのピケットや旗を題材にしたもので大変興味深かった。

ここで偶然、ノルウェー出身の現在ロンドン大学で済州４・３問題を研究し講義をしている４０代後半とみられる人と出会った。彼は韓国語と日本語が喋れるので会話に苦労はなかった。現在の済州４・３問題を取り巻く韓国内の状況について話し合った。秋ごろ大阪に来る予定だとのことで来阪時に再開することを約束した。

後から来館した康宗憲（カン・ジョンホン）氏としばらく歓談してから、二人で今回の私たち母国訪問団の歓迎会が開かれる会場に向かった。共に参加した日本の労働者・市民の一行と在日同胞訪問団を熱く歓迎してくれた国内歓迎委員会の皆さまのご苦労に旅の疲れも感じる事なく楽しい時間を過ごした。進歩党のキム・ジェヨン代表も入り口で出迎えてくれていた。キム代表は、あいさつで国会議員４名・党員１０万名と報告されていた。翌日、その進歩党の若い党員たちの活躍を目にすることになった。楽しい時間をすごした後、康氏と共に地下鉄でそれぞれの宿舎に帰った。

二日目、Ａ班Ｂ班に分かれて、「全泰堯（チョン・テイル）記念館」と「戦争と女性の人権博物館」を見学した、先の記念館では私が２００３年に初めて母国を訪問した時のことを思い出した。仁川空港について歓迎の花束をくれた人が全泰堯烈士のお母さんである李小仙（イ・ソソン）オモニだったのだ。オモニは労働者の母として慕われ労働運動の現場に足を運び闘いに連帯していた。戦争と女性の人権博物館では金東姫（キム・ドンヒ）館長のお話を聞く機会があった。館長とは尹美香（ユン・ミヒャン）元議員と並んで日本軍「慰安婦」問題解決のための取り組みを共にした「戦友」でもある。苦しい時期を乗り越えて館長として活躍する姿に安堵した。

いよいよ本大会の会場へ移動だ。ソウル市庁を後ろに龍山（ヨンサン）駅前あたりは韓国全土からの参加者でいっぱいだ。数万人はいただろう。気分はいやがうえにも高揚する。各団体のブースが並ぶ中、仲間のブースを探して一休み。知り合いとの懐かしい再会が続く。会場で約束したのに探せなくて会えなかった友人もいた。同じ会場で同じ体験をともにしていることに喜びを感じながら探すのはあきらめた。

２時間ほどの大会行事を通じて感じたのは、光復８０年になるにもかかわらず、いまだ民族主権を取り戻せていない現実を直視し、主権回復のための闘いを始める誓いを新たにするものだった。午後９時からいよいよ大行進が始まる。「反米自主」の大行進だ。ソウルに着いて何人かから「今日の行進は無理」との話を聞いた。理由は李在明（イ・ジェミョン）大統領の国民任命式を同じ時刻に行うので、大行進をやめるかコースを変えるよう南大門警察署から連絡があったらしい。大行進のコースは明洞（ミョンドン）あたりを出発して北上し、光化門広場の米国大使館・日本大使館前を通過して外交部庁舎あたりで解散する予定だったと聞いていた。大行進が始まる直前まで協議が行われていたようだ。予定通り大行進が始まった。韓統連と日韓平和連帯の訪問団は現地市民団体エリアで最前列に並ぶよう配慮がされた。日本から韓統連と日韓平和連帯のメンバーが参加してくれていますとアナウンスされて気分は最高。闘いの現場にいる幸せを感じて涙ぐんだ。しばらくしたら行進団が止まった。警察車両が妨害しているらしい。民弁

会長が先導車のマイクを取り「南大門警察警備課長」と名指しで「今あなたは、合法的で平和的な大行進を不法に妨害している。直ちに止めろ。止めなければ法的措置をとる。市民があなたを逮捕することができる」と主張し、動員された警官隊には「不当で不法な命令には抵抗する義務がある」と語り、大行進の行く手を遮る行為の不当性を訴えた。このとき行進参加の若者たちが大きな歓声と共に警察隊に妨害を止めるよう圧力をかけるために一斉に走り出した。勝利を確信させる確かな歩みが、歴史的な歩みが、今日の前で展開している。感動に次ぐ感動が繰り返される。権力者は国民の前に無力だ。李在明大統領も例外ではない。大行進が大詰めを迎えるころ、時間が深夜に及んだこともあって、訪問団長の判断で隊列から離れることとなった。厳しくも幸せな一日の終わりだ。宿舎に帰って一人勝利の美酒に酔いしれた。

三日目の解団式では、訪問団全員が参加して感想を語り合った。各本部代表が今回の訪問事業が大成功だったと語った。ある青年は今後ハンチョン（韓青）活動に、より積極的に取り組んで責任ある幹部になることをみんなの前で誓った。

今回の訪問団は、今後、韓統連の自主・民主・統一運動に画期的転換点になると確信できた。共に参加できた幸せをくれた同志たちに乾杯。

8・6広島から8・15ソウル、記憶に残る感動の旅

朴隆宏（パク・ユンガン）

昨年9月に亡くなったオモニが今年の前爆死没者名簿に記帳され、私にとっての前爆80年は公私共に大きな区切りの年となりました。盧武鉉（ノ・ムヒョン）政権下で初めてパスポートを手にして両親と共に韓国へ墓参りに行く直前、アボジが脳梗塞で倒れ、その後オモニも手術を繰り返し、今となっては両親との墓参りは叶わない夢となりました。

ここ数年の尹康彦（ユン・ガンオン）代表達の努力により韓国から多くの追悼団を迎える事ができました。途中、孫美姫（ソン・ミヒ）さんに対して広島空港で3時間に亘る取調べがありましたが、後日、ここヒロシマで初めて韓国追悼団と共に朝鮮半島出身者の前爆被害者追悼式を挙行しました。別会場で同時中継、同時通訳することにより、多くの日本連帯勢力とも共有する事に成功した事は今後の担保になると確信します。

原水禁大会への参加を皮切りに、前爆ドーム前でのダイ・イン、デモ、中国電力本社前での抗議集会、いずれも年々警察権力の圧力が強まる中、追悼団と共に闘えた事は光栄でした。韓統連中央本部をはじめ各地から応援に駆け付けてくれた同志に感謝します。

被爆者にとっての8・15は、終戦ではなく新たな苦しみの始まりでした。素直に喜べないのです。祖国にとっては分断の80年、複雑な思いを抱きながらも尹代表と日本の友人達と共に8・15大会に参加した私は3つの気づきを得ました。

1つ目は日本の友人達が韓統連の活動をよく理解しようとし、朝鮮の歴史を知ろうとし、文化までも愛そうとしている事に感激しました。

2つ目は長年、本と映像でしか見る事のできなかった韓国の民主化統一闘争の渦中に身を置けた事です。若い青年、学生、労働者達が統一先鋒隊として警察の阻止線に向け駆け出して行く姿に身が震えました。

3つ目は植民地歴史博物館での出来事です。職員の乃木さんと話していた時、若かりし頃の学生運動や政治犯救援運動などの資料が展示されているのを見つけました。「昔、この様な資料は大量に持っていました。廃棄しましたけど」と言ったところ「もったいない。私達の歴史じゃないですか。なんとか探し出して頂けませんか？」と言われ、日本に帰ったら微力ながら呼びかけて見ようと考えています。

この8・6広島から8・15ソウルは、私の人生の中でも記憶に残る感動の旅となりました。私の両親との故郷訪問は叶いませんでした。今の私の心の祖国は自主・民主・統一を闘う人たちだと思っています。

最後に広島チームで共に行動し示唆を与えてくれた金利明（キム・イミョン）氏、崔保（チェ・ボウ）氏にカムサハムニダ（感謝します）。

光復節80年ソウル大会に参加して

安昌浩（アン・チャンホ）

昨年の8・15集会に参加して、韓国の同志や日本の連帯関係の人と交流した。今年は昨年参加した人たちとの再会も楽しみの一つであった。

そして、たくさんの日本の友人との新たな出会いや組織での旧来の懐かしい友人にも会える事が出来た。

今回、オプショナルツアーで「全泰壹（チョン・テイル）記念館」に初めて行った。気が付けば齢70を越えたが、全泰壹の生きざまに触れ韓青時代を思い出す。全泰壹の伝記『炎よ、わたしをつつめ』の本が展示してあるのを見た時、全泰壹と李小仙（イ・ソソン）オモニの闘いを描いた「プルギレウェチム（炎の叫び）」の演劇や映画「オモニ」上映運動を韓青時代に全国展開したことが思い出され、急にこみあげてくるものがあり言葉が出なかった。全泰壹と同じ時代を生き活動したことが誇らしかった。

また、デモで警察の行進阻止に出会い、初めての経験で緊張した。その時、警察の阻止を突破しようとたくさんの進歩党所属の若い女性（おそらく学生もいたと思う）が突進して警察と対峙していたのをデモの最前列で遭遇した。これを見た時、心強く、また韓国の将来に希望を見出した。頼もしいかぎりであった。

今年は80年という節目の年であり、新しい大統領になり、我々が目指す自主・民主・統一運動にとって、さらに前進する年になることを願いつつ、同時に元気をもらったソウル大会参加であった。まだまだ頑張るぞ！

本当に重要なのは 革命のその後

金承民（キム・スンミン）

光復80年を迎える今年、祖国では「光の革命」を経て新しい大統領が誕生しました。これまでの革命がそうであったように、本当に重要なのは革命のその後です。これから

の祖国の進む道を決定づける契機となるであろう光復節に参加しないという選択肢はありませんでした。民族の一員として、在日同胞として、そして韓統連の一員として。

8・15をソウルで迎えるのは6年ぶりです。6年前は青年代表の立場でしたが、今回は韓統連代表団の事務局の一員としての参加です。いつの時も闘争の現場に臨む決意の高さは変わらないですが、緊張よりもワクワクした気持ちが上回る状態での代表団訪韓は本当に久しぶりでした。

訪韓団初参加の李眞希（イ・ジニ）副代表や薛英子（ソル・ヨンジャ）先輩をはじめ、共に神奈川から参加した方がたくさんいたことも、そんな気持ちになれた大きな要因だったと思います。期間を通じて同じ志の仲間が横にいることは、本当にかけがえのないことだと感じました。

全泰壹（チョン・テイル）記念館の全泰壹の伝記『炎よ、私をつつめ』を見て自然に涙が溢れたとき。ソウルの街なかで盃を交わすだけで嬉しかったとき。気がつけば極右集団の偽りの太極旗と星条旗を凄い目で睨みつけていたとき。じんわり熱いアスファルトの硬さを感じながら集会の熱気を胸いっぱい吸い込んだとき。規制線を突破した青年が走り出した瞬間に未来の希望を確信したとき。

瞬間瞬間に感じる言葉にしくなくても共有できている感覚、これを幸せと言わずになんと言いましょうか。また、これこそが組織を強くし、社会を変革する力になることは間違いありません。神奈川の参加者と、そして韓統連訪問団全体と、そして祖国の同胞たちとこの感覚を共有できたこと、確認できたことが、忙しさにかまけて以前より実践から遠くなっていた私にとっては大きな成果でした。

また、個人的には事務局の一員として役割を持てたことも良かったことでした。といっても写真を撮るということぐらいでしたが、写真に写る参加者の充実した顔をたくさん見ることができたのは役得でした。本当に皆さん良い顔をしていて、韓統連が好きだし、祖国と民族が好きだし、いまを充実して生きていることが伝わってきました。

最後に課題、というか、こうだったら良いなあということが一つ。今回、大会と行進で多くの旗がたなびき、とても感動的でした。あそこに韓統連と韓青の旗があればもっと素晴らしいし、あるべきだと感じているので、次回はずいぶん我らの旗を堂々とたなびかせましょう。

訪問団、本当にスゴハショッスムニダ（お疲れ様でした）！ 神奈川に帰ってからもうがんばります。

一年間の母国語学習の結果、自分の思いを伝えることができた

丁勝明（チョン・スンミョン）

光復節80周年の節目に参加して思ったことは、わが祖国は80年間ずっとアメリカに自主権を奪われ続けていて、自主を取り戻そうと闘い続けている人たちと今を共にしている、共に声を上げ、共に行進して、共に酒を酌み交わし、私はこの時、本国の同志と一緒に闘っているんだなと強く実感しました。

私は昨年、8・15ソウル大会に参加して、本国の同志たちと私の思いの共有、私の思いを伝えることが出来ませんでした。それはウリマル（母国語）が出来ないから、そして勇気が出せなかったからでした。とても悔しい思いをしました。なので韓国語アプリで毎日ウリマル学習を積んできました。まだまだ未熟で片言のウリマルだけど、今年は思いを伝える事を自身の課題として参加しました。本大会会場で金美樹（キム・ミス）氏と二人でピビンパを食べてテントで休んでいた時、一人の活動家が私達に話し掛けて来ました。彼はアメリカでビルの清掃業を営んでいること、韓国とアメリカを行き来していることなど、たわいのない話から「あなた達は何をしに来たの」と尋ねてきたので私はもちろん闘争しに行きました。李在明（イ・ジェミョン）大統領に5・9共同声明（大統領当選後の課題を確認した野党と市民団体との合意文書）を守るように牽引していかねばならないこと、韓米合同軍事演習を中止させて、南と北が統一に向けて話し合いのテーブルを作らなければならないこと、反米自主の闘いに勝利することこそが我々民族の生きる道であることを、間違いだらけのつたない言葉であったと思うけど、伝えることができたことが私にとって一番の成果だと思います。

今後も同志の皆さんと共に、反米自主、民主化統一運動とウリマルの習得に向けて努力していこうと思います。

先頭に立って運動をしているのだという事を実感

金美樹（キム・ミス）

昨年に引き続き今年も参加し、今年は光復80年という記念すべき年ということもあり、たくさんの同志と参加できたことがとても嬉しかったです。

デモの最前列に誘導され、昨年も驚きましたが、今年も先頭に立って運動をしているのだという事を改めて実感し、この運動が間違っていないのだと再認識しました。

やはり継続は力なんだと強く思い、祖国の平和と統一を願いながら、私もどんな形でも続けていきたいと思っています。

植民地解放80年の光復節大集会に参加して

中西巖

2025年8月15日、ソウル南大門前広場は10万人近い市民が座り込み、「光復80年 平和・主権・歴史正義実現汎市民大会」が開催された。

午後4時ごろから道路沿いに多数のテントが立ち並び、いろいろな取り組みがなされていた。署名活動、シール投票、各種団体や集会の案内、書籍や食べ物の販売など。また独立運動に関わった抗日義兵闘争、尹奉吉（ユン・ボンギル）、安重根（アン・ジュンゴン）など多くの義士や詩人尹東柱（ユン・ドンジュ）などの解説を施した写真をプリントした旗が掲げられていた。会場中心より遥か手前から道路の中央で民族衣装を着た人たちによるプンムルノリ（民族楽器の演奏）が賑やかに奏でられ雰囲気盛り上げていた。シール投票ではトランプ氏と李在明（イ・ジェミョン）氏への注文や問題提起をしたければ顔写真やその周辺にシールを貼っていくもので、自分はトランプ氏のほっぺ

あたりにレッドカードならぬレッドシールを貼り付けた。他の人もトランプ氏の方ばかりにシールを張り付けていた。付近一帯が縁日を迎えているような雰囲気があった。

唯一違ったのは、会場から相当離れた交差点辺りで、尹前大統領支持派の勢力が大音量で（恐らく）戒厳令の正当性や尹氏や金建希（キム・ゴニ）氏夫婦の逮捕を激しく非難し、即時釈放を訴え集会会場近くまで迫ろうとしていたことだ。勿論、警察は彼らのそれ以上の前進は許さず、道路を半分封鎖し、車両通行を厳しく制限したのでそこから前には進めなかったようだ。

午後6時、8車線ほどある（？）大通りの大半の交通を遮断し、数十名が横一列に並び道路に座り込む。すでに長い縦列ができていて仲間の訪韓団を見つけるのに相当苦労した。青いTシャツの一団を目印にしてようやくたどり着いた。中央ステージから100メートルくらいのかかなり前の方にいたので驚いた。横数十名の列が縦に数百、いや千以上はあっただろう。壮観であった。数万人の人々が道路に座り込み、集会のアピールに聞き入り、シュプレヒコールを挙げる。沢山の踊り、パフォーマンス、歌に合わせ、手を振り、ともに歌う。7時半ごろになり暗くなってくると一斉にペンライトをかざす。

私たちの横は水色のお揃いのTシャツを着た学生たち。舞台と一体となった反応が心地よい。どの顔も笑顔で、時には友人と短い会話を交わしながらもまっすぐ前を見つめている。韓国社会、朝鮮半島全体の未来への確信に満ちた、屈託のない笑顔が眩（まぶ）しかった。この人たちなら、やがて訪れるであろう朝鮮半島の再統一と民族和解の道筋を描き、実現するのだろう。思わず自分は今どんな表情をしているのかしらんと考えた。同時に日本の街角ですれ違う人々の表情や大学生の姿、日本人ファーストの連呼を思い浮かべていた。

日没とともに人の数は膨れ上がり、舞台のうたやパフォーマンスに合わせたペンライトが波のように揺れる様に、長い時間をかけて勝ち取ってきた、この国の民主主義・自由・平等を求める営みの確かさを体感させてもらった。

言うまでもなく、光州民主化運動以降の軍政にあっても休むことなく続いた抵抗の闘いは1987年1月のソウル大生、朴鍾哲（パク・ジョンチョル）さんの拷問死が明らかになると状況は一変し、あの大統領直接選挙制を受け入れた6・29民主化宣言につながった。『ある闘いの真実』はエンターテインメントの映画だが、この年になっても激しく心を揺さぶられた。それが2008年のあのロウソクデモや、まだ記憶に生々しい2024年12月3日の戒厳令発布とわずか6時間後の撤回と尹政権の事実上の崩壊へとつながった。

余談だが、2年前に韓国南部の統営（トンヨン）市を訪れた際、立ち寄った場所の一つが忠武教会で映画『ある闘いの真実』で主人公が追跡する軍から逃れるスリリングなシーンを撮影した場所である。

韓国のリアルを見ることができた

久保泉稀

私は今回の韓国訪問を通じて、たくさんのことを学ぶことができました。たとえば韓国の文化について、日本との違い、流行りなどを知ることができました。そして、初めて体験したデモはとても記憶に残るものとなりました。

デモがどのようなものかあまり知らなかったので今回初めてデモについて学びましたが、警察と対立することは珍しく、母も姉も周りの方たちもこのような体験は初めてとっていて、韓国のリアルを見ることができたような気がして良かったと思います。韓国の方たちが必死に闘ってくれていることに感動しました。

今回は参加させていただき本当にありがとうございました。とても良い経験となりました。

広島で「反米自主」の声を上げ続けるために

大月純子

この度は、「光復80年韓統連訪問団」にチーム広島の私を含む4人の日本人の参加を受け入れてくださったことを、心より感謝いたします。そのことの重みを痛感しています。

光復80年目の8月15日をソウルで、これまで民主化を求めて闘い続けて来られた韓国の方々や韓統連のみなさまと共に過ごすことができたことを心より感謝いたします。

解団式の時の宋世一（ソン・セイル）委員長のお言葉にもありましたが、尹錫悦（ユン・ソンヨル）の大統領就任時から退陣を求めて来られた取り組みがあり、それを受けて2024年12月3日の尹錫悦大統領の内乱・戒厳令があり、その日から尹錫悦弾劾のために、極寒の中、闘い続けて来られ、李在明（イ・ジェミョン）大統領を誕生させた「光の革命」のただ中に、一瞬ですが身を置かせていただけたことに心が震える思いがしました。

「光復80年 平和・主権・歴史正義実現汎市民大会」の中で、韓統連が参加していることが報告された時、韓統連のこれまでの取り組みがあったからこそ、私たちがこの場にいることができるのだということを痛感いたしました。

2024年8月3日～6日に「広島原爆79年、朝鮮人犠牲者追悼団」が広島を訪問され、1年かけて、「広島原爆80年、朝鮮人犠牲者追悼行事」を韓統連広島本部と韓統連中央本部のみなさまと共に準備してきました。そして、2025年8月3日～7日まで「広島原爆80年、朝鮮人犠牲者追悼団」が広島を訪問され、交流を深めることができました。8月5日に「広島原爆80年、朝鮮人犠牲者追悼行事」を行うことができました。今年は8月2日に、初めて広島県朝鮮人被爆者協議会が中心となって「朝鮮半島出身原爆犠牲者を追悼する会」が行われました。そして、韓国から来られた「広島原爆80年、朝鮮人犠牲者追悼団」によって、韓統連のみなさまや広島県内外、日本各地からの参加者と一緒に、朝鮮人犠牲者の追悼式を行うことができたことは意義深いことだと

思っています。この追悼行事を行うことができたのも、韓統連がこれまで連帯されてきた進歩連帯を中心とした韓国の民主化を求める方々との交流の歴史があったからだと痛感しています。

「広島原爆80年、朝鮮人犠牲者追悼団」のメンバーと8月14日に行われた「歓迎交流会」や8月15日の「光復80年、平和・主権・歴史正義実現汎市民大会」において交流することができました。それだけではなく、8月16日には「追悼団」のチョ・ウォンさんが、チーム広島と「広島原爆80年、朝鮮人犠牲者追悼団」参加者との交流会を企画してくださり、再び交流を深めることができました。

オプショナルツアーで「戦争と女性の人権博物館」と「美しい青年、全泰壹（チョン・テイル）記念館」を訪問することができ、講演やガイドを通して、改めて多くのことを学ばせていただくことができました。特に、「美しい青年、全泰壹記念館」において、全泰壹さんの人柄や生き方をお聞きすることを通して、「美しい青年」という言葉の意味を実感することができました。1970年11月8日に生まれた私にとって、私が生まれた5日後に全泰壹さんが「私たちは機械ではない！」という言葉と共に、労働環境の改善を求めて焼身自殺をされたことに、自分の生きてきた人生と、その頃の韓国の労働者が置かれていた状況、その日から今日までの取り組みに改めて思いをはせることができました。

8月16日に西大門刑務所歴史博物館を訪問し、李小仙（イ・ソソン）オモニの展示の前で、李小仙オモニが全泰壹さんの想いを受けて闘い続けたその生涯について金利明（キム・イミョン）さんから教えていただき、思いをはせることができました。

チーム広島で明洞聖堂や植民地歴史博物館、民主化運動記念館、盧武鉉（ノ・ムヒョン）市民センター、西大門刑務所歴史博物館、安重根（アン・ジュングン）記念館、大韓民国歴史博物館などを訪問することができました。その中で、日本帝国が植民地支配において、どのように民族の自主権を奪い、それに抗い民族自主を求める烈士たちに、どれだけ筆舌尽くしがたい弾圧をしてきたのかを改めて知ることができました。それが、のちに韓国の軍事独裁政権において、引き継がれてしまったことも改めて学ぶことができました。と同時に、そこには日本の植民地支配に抗い続けてきた烈士たちの闘いがあり、その闘いが今日まで民主化を求める闘いに脈々と引き継がれてきたことを学ぶことができました。それは解団式でのハン・チュンモクさんのお話の中で郭東儀（カク・トンイ）議長と金政夫（キム・ジョンブ）議長との出会いに触れられ、「郭東儀議長と金政夫議長の目指された統一の道と自主の道を命が尽きるその日まで歩んでいきたい」という言葉にあるように、これまで民主化を実現するために闘ってこられた烈士や諸先輩方の歩みが、現在の韓国における民主化を求める闘いに引き継がれていることを改めて知ることができました。

そして、「日章旗が下がった瞬間に星条旗が上がり、80年間アメリカの支配下にあるという」というハン・チュンモクさんの言葉に象徴されるように、韓国も日本もアメリカの支配下、核攻撃態勢の下にあることが、朝鮮戦争を終わらせて、南北を統一することを阻んでいます。その象徴が韓米日の軍事演習です。ですから、一日も早く、韓米日

の軍事演習を終わらせ、日米安保体制を終わらせ、自主的に平和的に民主化を実現するために、日本に生きる者として、できることをしていかなければならないという思いを強く致しました。

そのためにも金利明さんが解団式でおっしゃったように、「反米自主」を堂々と広島で伝えていきたいと思います。そして、康宗憲（カン・ジョンホン）さんがおっしゃっていたように、その出会いと学びを糧に、広島で反米自主と南北統一を実現するための「先鋒隊」となれるように、8月3日～7日の「追悼団」と今回の韓国訪問で出会った韓国の民主化を求める方々や、韓統連のみなさまとの連帯をより一層強めていきたいと思います。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

あらそわないために たたかい こえをはりあげる

森本すぎな

あらそうことと たたかうことは ちがう
わめくことと こえをはりあげることは ちがう
うたうこと おどること わらいあうこと
いっしょに ごはんをたべること
これも たたかうこと
あらそわないために たたかい こえをはりあげる
われわれは みな ちがうかたちでいき かんがえ はなす
まったくおなじであるひつようはなく
その ひとつひとつのかさなりが
くにのりんかくになり いのちをもつ

あの情熱がなくてはね

森本忠紀

「パパ一番若い顔してたよ」。娘のすぎながそう言った。

南大門の大きい車道の片側を封鎖して座り込んでの集会からデモ行進に移ったのは午後9時を過ぎていた。その数万という巨大なデモの群れはそれだけで圧巻だが、韓国の男女の参加者は圧倒的に若者が多く元気いっぱい、解放感が漲（みなぎ）っている。その若者たちが大勢一斉にドッと走り出した。デモ隊の前に立って行進を阻んだ警察に對抗して、これを包囲しようと動いたのだった。警察も大慌（おおあわ）てで走っている。夜の大群衆デモなのだ。一拳に現れた劇的な光景が眩（まぶ）しく心踊った。ホテルへの帰り道で、すぎながすぐに隣にやってきてにっこり笑った。「パパも走ったよ」。こちらにも笑いかけるのに即座に返ってきたのが冒頭の言葉だった。「なかなかすごかったなあ」「うん、怖かった。浅川さん大丈夫かなあって」。あの時、車椅子の浅川さんが混乱に巻き込まれたら大変だと心配したのだった。デモ行進の激しい場面に遭遇しての感想がこれだった。すぎなは、今年初めて一緒に訪韓した。今年25歳、若い感性が初めて

の韓国をどのように経験するだろうか？ぼくには興味深く刺激的なことだった。冷静な子だと思った。

南大門の集会は午後7時始まりだったが、早くから若い男女が続々と集まりじっとしていない。5時ごろにはもう若い人たちが舞台上に出てきては跳（と）んだり跳（は）ねたり身体いっぱい使って表現する、そのパフォーマンスにすっかり引き込まれ彼らの熱い情熱に感動した。そこには自由がある。日本でも若い人たちは同じような歌やダンスを盛んに楽しんでいる。ところが日本のこの分断は何だろう？日本の労働運動、市民運動にも韓国の若者のあの情熱がなくてはね。

今年光復節80年は、日本から訪韓団100人を成し遂げた画期的な年となった。「朝鮮半島の平和がアジアに平和をもたらす」。日本のぼくたちはどのように韓国と、そしてアジアと連帯することができるだろうか？ぼくは80年前に立ち返って日本帝国に対する闘いを始めることが大事だと思っている。

「はだしのゲン」は漫画表現によって一人で闘いを始めた。「はだしのゲン」は言っている。ひとりひとりの闘いが大事だと。いま、すぎなの協力で「はだしのゲン」の闘いに連帯する紙芝居をつくっている。来年光復81年の訪韓には、これをもって参加したい。

全泰堧記念館では涙が出た

薛英子（ソル・ヨンジャ）

本当に良かった。自分は杖をついて歩いているんだけど、階段しかないようなところでも、隣に歩調を合わせて歩いてくれたり、いろんなところでいろんな人に助けられた。

結果的には行ってよかった。豚カルビがとっても美味しかった。途中で雨が降ってきたけど、初めて豚の皮も食べることができてとてもよかった。

民泊でも良くしてもらった。全泰堧（チョン・テイル）記念館では涙が出た。こんなところで女工さんが働いていたんだと感じた。それを改善するために命をかけていたんだと感じることができた。

自主で統一を勝ち取らなければならない

李香代子（イ・ヒャンデジャ）

私は45年以上前から運動している。最初の時には反独裁民主化運動。光州を超えて、自主・民主・統一運動。やはり自主が一番大事だと思う。反外勢、3・1独立運動100周年と三年前の韓国。アメリカに対してのスローガンを強く掲げていることを目の当たりにして、自主で統一を勝ち取らなければならないということを感じることができた。

全泰堧（チョン・テイル）記念館に行って、戦争と女性の人権博物館、闘争の歴史を肌で感じて、その状態で本大会に参加できたことは本当に良かった。館長さんからいろんな話を聞いて本大会に参加できたことが本当に良かった。李在明（イ・ジェミョン）

に対して、広場の力で大統領になったんだから、そこはちゃんとしてほしい。光州を経験した上で、いい方向に向かって自主・民主・統一に行って欲しいと思った。

民衆が統一の道に導いていく

申久江（シン・クガン）

いろいろあったけど、行って良かった。2025年が戦後80年と言われているけど、実際1945年から今までを考えると、80年の間に埋もれてきた歴史が朝鮮半島一帯にあると実感している。

1990年に参加した汎民族大会（板門店北側地域で開催された「祖国の平和と統一のための汎民族大会」）のことを思い出す。朝鮮民主主義人民共和国のことを「北部祖国」と表現していた。

ソウルの大会には初めて参加した。北と南に別れて80年たった今でもまだ分断されている現実を考えると難しいと感じる。今でも分かれているということは自分にとってもとても不自然に感じている。南の大統領の獰猛（どうもう）な相手発言には複雑なものを感じる。民衆が統一の道に導いていくことが自分にとっても刺激に感じた。

戦後80年を振り返って考えた時、これから先は今まで生きてきたように生きられないという思いもある。自分の71年を検証しながら、これからどういうふうに生きていくのか。韓青を通して、点の歴史が線になって、それが面になったような気がする。自分ひとりの力ではとても難しいけど、つながることに意味があると感じた。

東京でケガをして、ソウルで病院に通うことができたことは貴重な経験だった。民泊にとまることがなかったら、ホテルに缶詰めだったはず。民泊のソヨンさんのおかげで助けられた。私一人の力ではなく多くの人の力を借りて参加することができたと思っている。

希望に生きるものは常に若い

金裕理（キム・ユリ）

先輩たちも話されたように今回行けて良かった。女性の大変さは、まだセヒョンさん（夫）に通じていない。

家族で行けたことの意味があった。映像を見て光復80年を振り返ると、意義を改めて感じた

汎民族大会に黄色いシャツを着て参加した35年前から今につながっていることを感じた。

すべてのスケジュールに参加はできなかったが、そこに行くことに意義があった。浮島丸のミュージカルを見に行って、タクシー運転手の方と話したことや、浮島丸の歴史を感じることもできた時間だった。

チェ・ヒョヘン兵庫本部代表が熱弁しながら、パスポートを無くしたことも旅のだいが味になった。

そこに行くことは大事なことで改めて実感した。

「希望に生きるものは常に若い」。今回の参加者全員にそのことを感じた

キム・ユンサ副委員長もスマホを無くして大変だった

45歳の節目に80周年の節目に参加したが、100周年の65歳の時に参加したとしても、先輩たちの方がまだ年上だ。希望を持って生きることが、どれだけ大事か体感した訪韓になった

皆さんに助けられながら参加できたことに感謝申し上げます

一人ひとりの思いを集約できる訪問団になれてよかった

文世賢（ムン・セヒョン）

今回の8・15大会に関しては、去年の6月から構想を練っていた。2024年の訪問団は難しいけど、2025年は80周年でもあるから、絶対みんなで行きたいと思っていた。いつも情勢を共有しているメンバー、実践をしているメンバーたちと一緒にきたかった。付加価値としてのノレ（歌）は、来年以降に持ち越し。感想を受け止めるだけで大変。胸がいっぱい。光の革命の現場に入って私たちは体現できた。いつもの同志たちと当たり前のようにソウルの街並みを歩いて、美味しいものを食べることもできてよかった。一人ひとりの思いを集約できる訪問団になれてよかった。今後の神奈川の活動につなげられるようにしたい。がんばっていきたい。

パレスチナ人の女性との遭遇が最も素晴らしい瞬間でした

升水和繁

私が朝鮮半島を訪れるのは今回の訪韓団で7回目となります。ソウルは3回目で、残りの4回は平壤です。何故か日本と国交が無い朝鮮民主主義人民共和国の方が一回多いって事になっています。関西空港の出入国時に税関の職員ともめごとにならないのは（キャリアケースの中を見られたり、麻薬犬に吠えられたり、お土産を没収されたり）久しぶりでとても新鮮でした。

今回の訪韓で特に印象に残っているのは「光復80年 平和・主権・歴史正義実現汎市民大会」後のデモ行進の時にパレスチナ人の方と遭遇した事です。本大会時に私は訪韓団の前から2列目にいたのですが、行進前に西山団長から「デモは1列目が横断幕を持って、1列目と2列目の間に女性が二人入るから入れてあげて」との説明を受けていたので、行進の隊列は1列目が訪韓団の横断幕、2列目がパレスチナの国旗、3列目が私の順でのデモ行進となりました。

デモ行進が始まってから程なくして2名のアラブ系の方が無言でデモ隊に近づいて来ました。連帯ユニオンはデモ行進や抗議活動中に部外者や警察官と一悶着（ひともんちゃく）起きるのはよくある出来事なので、変わった動きをする人を見つけると警戒モードに入ります。

近づいて来るアラブ系の方はヒゲを蓄えている男性とヒジャブを被っている女性の2名で、私は速やかにヒゲの男性とデモ隊との最短の動線を潰すため、男性とデモ隊のちょうど中間にポジショニングします。足の動き・視線や手に何か持っているか？を観察

しながら「ヒゲの男性がデモ隊に不用意に近づかないように」圧をかけます。私の警戒を察知したのかヒゲの男性は一定の距離を保っていますが、ヒジャブを被った女性は私の圧を無視してグイグイと近づいて来ます。特に変な動きは無いもののヒジャブを被った女性は手を伸ばせば届く距離まで近づくと手元のスマホをもそもそと動かして写真を撮りたそうなゼスチャーとアイコンタクトで無言のアピールをします。デモ隊に危害を加える可能性は無さそうな雰囲気なので、写真を撮りたい方がいる事をデモ隊に伝えて、1列目と2列目の距離を広く取ってもらってパレスチナ国旗の撮影対応をして頂きました。

ヒジャブを被った女性はスマホで写真を撮り終わると自身の胸元をさわる仕草をしながら小さな声で「パレスチナ」と言いました。彼女が発した唯一の言葉が「パレスチナ」でした。彼女とヒゲの男性が無言で近づき簡単な日本語や韓国語を話さなかったのは、訪韓団のメンバーが日本人なのか韓国人なのかの違いがおそらく認識できてなかったのでしょう。イスラム教の戒律で女性は家族以外の男性との接触や会話を禁止されていて、国や地域によっては厳しく処罰されるにもかかわらず「パレスチナ」と伝えたのは彼女にとっての精一杯の意思表示なのでしょう。彼女自身が内包する人種・国籍・言語・宗教の壁を乗り越えて、同じ想いを共有している事を伝える精一杯の一言だったのでしょう。自身の中に在る多くの壁を乗り越えて「パレスチナ」の一言を伝えた彼女の勇気に敬意を表したいと思います。

ソウルと平壤の2つの首都を訪れた私の率直な感想なのですが、今回の訪韓で平和と統一について障害となっているのはソウル市民じゃないのか？と疑問を感じました。私は「日朝友好なにわの翼・大阪」の訪朝団で2018年4月27日の板門店での金正恩（キム・ジョンウン）委員長と文在寅（ムン・ジェイン）大統領との会談の翌日に平壤に入りました。行く先々で出会った平壤市民の方々は平和と統一に向けて大きな前進となった板門店での首脳会談を心の底から喜んでおられました。平壤市民の喜びはイデオロギーや教育の類よりも、戦争が終わり平和が訪れて朝鮮半島の統一への希望と歓喜が強い印象でした。私は板門店に常駐している軍人に「今まで分断の象徴と呼ばれていた板門店が、金正恩委員長と文在寅大統領の会談で平和の象徴と呼ばれるようになる事についてどう思うか？」と質問しました。その軍人は「板門店での金正恩委員長と文在寅大統領の会談が平和と統一に向けて大きな一歩となった事を嬉しく思う。板門店が分断の象徴ではなく平和の象徴と呼ばれるようになる事を心から歓迎する」と返答しました。戦闘のために特殊な訓練を受けている軍人が満面の笑みでそう答えました。

その一方でソウル市民はどうか？警察官や軍人はどうか？心の底から平和と統一を望んでいますか？平壤市民と同じ想いを共有していますか？分断を利用して利益を得ていませんか？平和と統一の障害となっているのはソウル市民なのではないですか？

これまでの韓国での民主化運動やキャンドルデモや尹錫悦（ユン・ソンヨル）大統領の戒厳令に対する民衆の運動は、とてつもないエネルギーが生み出された運動だと思います。しかし、いずれも韓国国内の内政問題です。平和と統一は複数の国家間の問題、

つまり外交問題なのですが、皆さんの運動は平壤市民の心に響いていますか？平壤市民の声を聴いて、心に触れて、想いを共有していますか？いつまで朝鮮民主主義人民共和国を分派とのたまひ主権国家として認めないつもりなのですか？パレスチナ・ガザ地区のように毎日数百人の民間人が死亡する悲惨な現状が、今の朝鮮半島で起きていなくて良かったと思っているのではないですか？ほっとしていませんか？

人種・国籍・言語・宗教の壁を乗り越えて平和への想いを共有して「パレスチナ」と精一杯の一言を伝えたヒジャブを被ったパレスチナ人の女性こそが、心の底から平和を望んでいると感じました。パレスチナ人の女性との遭遇が今回の訪韓でもっとも素晴らしい瞬間でした。

自己主張はするが相手の声を聴かない運動に、心の底から平和を望んでいるパレスチナ人が近くにいても、その存在に気がつかない運動になっていないでしょうか？

光復80年のソウルで

九門りり子

あの暑い、熱い3日間をこの半月、何度も思い出しています。

もう引き返さないと…というヒリヒリした思いで歩き続け本当にたどり着けた全泰吉（チョン・テイル）さんの銅像のこと。その彼の功績を熱く厚く語ってくださった記念館の方と通訳してくださった方。ギリギリで間に合って参加できた1日目の交流・歓迎会での食べきれないほどのご馳走や飲み物を用意してくださった現地の方々。

そして、お祭りの様相で盛り上がるソウルの市街地を文字通り熱に浮かされたように歩いてデモの会場まで行ったこと。建物の壁面にも街灯にも国旗がはためいて、風車や大きなうちわになった国旗を道行く人たちがみんな手にしたりリュックに差したり。テントに座ってみんなで食べた統一ビビンバや不思議な味の凍ったジュース。全速力で駆け抜けていく学生たちの群れ。警官隊。最終日「戦争と女性の人権博物館」での静かな、でも深い時間の流れ。

勉強不足で知識も意識もなく、ハングル文字ひとつ読めずしゃべれずの私に、訪韓団の皆さんも、現地で出会ったみなさんもとてもやさしく親切にしてくださいました。感謝しかありません。

それなのに、何一つまとまった文章にできずで申し訳ありません。ただ、毎日1万歩以上歩いていたにもかかわらず、帰ってからもほとんど身体の疲れを感じる事がなかったのは、あの韓国の人々のエネルギーが自分の中にも灯ったからなのかもと思っています。これからここから、私も考え始めようと思います。

ありがとうございました。

初めてのソウル

石打澄枝

茨木のり子「ハングルへの旅」に始まり、「空と風と星と詩 尹東柱（ユン・ドンジュ）全詩集」から「サイの角のようにひとりで行け」孔枝泳（コン・ジヨン）を経て、

2000年代の韓流ドラマ、斉藤真理子の翻訳・エッセーへと、私の韓国への心旅は続いてきました。その底流には、高校時代に出会った友人の2009年発行の「朝鮮王妃殺害と日本人」と2014年の「日露戦争と大韓帝国」金文子（キム・ムンジャ）の力作を読破したい。しなければとの想いがありました。

日韓平和連帯8・15訪韓への事前学習会で、康宗憲（カン・ジョンホン）さんが、金文子さんを御存知と聞き、ここに道はつながっていたんだと思いました。

「ユン大統領弾劾の女性パワーに学ぶ集い」では、20代、30代の韓国女性の静かな熱さを見て、日本女性の現況のわかりにくさに心が重くなりました。韓国女性団体連合のヤンイ・ヒョンギョンさんは、御両親のヤン氏とイ氏を繋げて、ヤンイと名乗っておられました。韓国版夫婦別姓問題が見えました。また、通訳の呉民淑（オ・ミンスク）さんや、ソウルでの全泰吉（チョン・テイル）記念館で通訳して下さった東京の加藤正姫さんや、デモ行進の先導をされていた孫美姫（ソン・ミヒ）さんから、先輩女性（年齢的には年下かもしれませんが）たちの圧倒的な信頼感、底力強さに痺（しび）れました。

事前学習会や、訪韓当日に知り合った参加者それぞれの幅広さにふれ、前向きになりました。ソウルは明るく、美しかったです。

100名にのぼる訪韓団は希望の拡がり

加来洋八郎

尹錫悦（ユン・ソンヨル）韓国大統領は2024年12月3日、米国の対中朝包囲戦略を踏まえ、第2期トランプ大統領の米国ファースト政治迎合の軍事クーデターの拳に出た。

しかし、尹錫悦大統領の保身と点数稼ぎを狙った軍事クーデターは民衆の身体を張った行動で阻止され、韓国民衆の自主・民主・統一を求める闘いの根強さを示した。

韓国民衆は更に李在明（イ・ジェミョン）大統領を実現し、世界（特に日本・米国・朝鮮等）の動向に大きな影響を与えている。

1945年8月15日、日本は連合軍に無条件降伏し、朝鮮は日本の植民地支配から解放された。しかし、米国の戦略で朝鮮半島は分断され、日本は日米安保条約の基に置かれた。

韓国では8月15日を光復節と呼んでいる。私たち日本の民衆はこのこと自体から韓国民衆と日本軍国主義との関係、米国の手先となって再びアジア侵略に動き始めた日本を想起すべきだ。

戦争の出来る国造りから戦争する国へと歩を進めて来た日本の反動勢力に抗し、日本の民主主義を守り、発展させ、アジア・世界の平和を守りたいと願う私たちにとって2025年の韓国光復節参加を中心とする訪韓は韓国社会の実情に触れ、進歩的な民衆から学ぶ良い機会となった。

妻の理解・協力、多くの皆さんの協力、特に多忙な中で行動を共にした奈良からの団員10人および大阪を中心に日韓平和連帯につながる皆さん、更に韓統連・韓青等約100名にのぼる訪韓団は希望の拡がりの場となった。

韓国国民の素晴らしい熱き思いを生で感じた

江原豊

全くの部外者の私をご縁あって2025年訪韓団に参加させて頂く事となり有り難く思っております。

このような企画を立案され、現地で引率指導して下さいました関係各位には心より感謝申し上げます。厚く御礼申し上げます。

日本の加害、韓国の労働者運動の歴史に現地で触れる事ができ、また集会では韓国国民の素晴らしい熱き思いを生で感じ、他ではできない体験をさせて頂きました。ありがとうございました。

浅学非才の私が帰国後そんなに時間が経過しない内に政治的歴史的な意見を申し上げます事は、さまざまな立場の方々がいらっしゃいますので誤解を招く結果になっても困りますのであえて私見を述べる事は控えさせて頂きます。ご容赦ください。感想にもなっていませんが。とりあえず御礼まで

韓国民衆の闘いを学ぶ旅

楠本雅章

日韓平和連帯8・15訪韓団のメンバーとして韓国ソウルを訪問した。奈良県から10名、関西から48名の仲間とともに「光復80年平和・主権・歴史正義実現市民大会・デモ」に参加するためにソウルを訪れた。思い起こすのは、36年前の1989年大阪日朝共闘（朝鮮の自主的平和統一を支持し韓国民主化闘争に連帯する大阪府民共闘会議）の訪韓団として、勝間芳江さんを団長に助さん格さんよろしく、私と大阪市職下水道支部のTさん、通訳（韓国語が少しわかる）兼案内人で大阪府職の橘秀郎さんの四人で訪朝した時のこと。当時の韓国は、軍事政権下で主要な道路は重武装の戦闘警察が固め延世大学前は催涙弾ガスが充満していた。そのような中、李小仙（イ・ソソン）オモ二とお会いすることができた。李小仙オモ二との話し合いでは、オモ二は、自分の親世代で80歳代の勝間さんがこの軍事政権下の韓国に会いに来てくれたことに感謝するとともに、指名手配中にもかかわらず、パンを買いに行かれた。韓日辞書を片手に通訳をしている橘さんには「もっと韓国語を勉強しなさい」と優しい励ましの言葉、映画「オモ二」（全泰壹氏の志を継いだお母さんの闘いの物語）主演女優の磯村みどりさんについては、「私、あんなに美人ではない」と言われ（全員で大爆笑した）。勝間さん80代後半、李小仙オモ二60代、Tさん、橘さん、楠本40代のことです。

8月15日朝、以前から希望していた全泰壹（チョン・テイル）記念館の訪問が実現した。全泰壹氏の命をかけた闘いは、1978年の映画「オモ二」上映運動を通じて知ることができた。全泰壹氏は、私と同じ1948年8月生まれ。同じ年齢の労働者とい

うことで親近感を覚えていた。しかし、ずっと「焼身決起」には違和感を持ち続けていた。はたして義憤に駆られても自らの命をかける行動に出られるのか？はたまた資本家・権力に対峙する別の方法はなかったのか？今回の訪韓団に応募したのもこのモヤモヤとした違和感を解消したい理由があった。

最初に、館内案内人の「全泰壹精神とはなにか？この記念館の見学を終えるときにわかります」との意味深長な説明があった。全泰壹の夢は、愛一全泰壹の他人に対する共感と配慮、連帯一現実と一緒に改善しようとした全泰壹の希望、行動一厳しい労働環境を改善するために率先した意志、の生きざまが語られ、そして、“労働基準法を守れ”

“我々は機械ではない” と叫び自らの体に火をつけたことを涙ながらにうったえられた。皮肉なことに、館内に日本のJUKIミシンが展示されていた。JUKI（労組）は日本のナショナルセンター連合会長の吉野友子氏の出身単産、労働組合運動は全くしないが、ミシンは優秀。

最終ステージの説明を聞き終え、「全泰壹精神とは何か」の答えは、全泰壹氏が亡くなる前、母親に自分が叶えることができなかったことを叶えてほしいと頼んだ。オモニの李小仙氏は遺志を汲んで清溪（チョング）被服労働組合を設立した。しかし、朴正熙（パク・チョンヒ）政権は弾圧して李小仙氏の身柄を拘束し、労組の解散命令を下した。李小仙オモニは、これに立ち向かって闘いを挑み1984年に労働組合を復活させ、1987年に労働組合の合法化を達成した。この全泰壹と李小仙オモニの闘いは、韓国労働問題に対する社会的覚醒を呼び起こし、大学生や宗教界が声明書を発表し、集会・デモ・追悼式開催などの方法で連帯を組み、労働現場では民主労組などが労働組合運動を展開し、YH貿易労働組合の労働条件改善、九老同盟ストライキ等を得て1987年の労働者大闘争を勝ち取り、現在につながっている。

全泰壹精神とは自らの命を犠牲に、しかし、その精神は見事に蘇（よみがえ）り、韓国労働運動に受け継がれた永遠に続く労働運動の指導指針ではないだろうか!! と理解した。

今回の訪韓では、喜寿（77歳）で初めて車いすでデモに参加できたこと。日本の民主化には韓国民衆の闘いに学ぶことが多々ある。

歴史的な光復80年 ソウル大会と韓日民衆連帯の新たな第一歩

金隆司（キム・ユンサ）

8月15日は、日本が連合国に無条件降伏した敗戦の日であり、朝鮮は日帝の植民地支配から解放された「光復節」だ。本来の「光復」とは民族の自主独立を取り戻すことであり、光復節は「独立記念日」であるべきなのだが、国が分断されたまま80年もの歳月が流れ、韓国ではいまだに軍の作戦指揮権が米国に掌握されているように、自主権が侵害されたまま現在に至っている。植民地時代の独立運動は、分断時代の統一運動へと継承され、8月15日は、日本の植民地支配からの解放を祝う日ではなく、真の解放、すなわち民族の自主統一を実現しようとする決意の日である。

尹錫悦（ユン・ソンヨル）政権の光復節は惨憺（さんたん）たるものだった。過去の日本の植民地支配への言及はなく、『北の核の脅威』を強固な韓米同盟で打ち負かす」と豪語したり、昨年の光復節には、李承晩政権以来の吸収統一政策である「統一ドクトリン」まで発表した。2年連続して軍事パレードを実施し、平壤に無人機を飛ばすなど対北敵視、挑発政策を繰り返してきた。戒厳令が成功していれば、朝鮮半島が想定外の危機的な事態になっていたおそれがある。

光復80年という歴史の節目の年を「光の革命」によって誕生した政権の下で迎えるというのは非常に幸いなことであり、民族の将来に明かりを灯すものだ。新政権は、「北の体制を尊重し、いかなる形の吸収統一も求めず、一切の敵対行為をする考えもないことを明確にする」という南北関係改善の姿勢を打ち出した。昨年の光復節の大統領の演説とは、180度の大転換だ。

分断80年。もう歴史の後退は許されない。光復80年を契機に、真の解放を求める闘いを本格化し、平和と統一をより確実なものにしていかなければならない。その思いをより強くし、勝利を確信させてくれたのが、今回の8・15汎市民大会であった。

「光復80年 平和・主権・歴史正義実現8・15汎市民大会」は、午後7時から崇礼門（南大門）前で開催された。軽快なKPOPの曲にのって「光の革命」を実現させた市民団体や政党の旗の行進で始まった大会は、各団体からの挨拶の間に映像や合唱、ダンスなどの演出があり野外ライブのような躍動感があった。挨拶では、「尹錫悦の戒厳令（親衛クーデター）は阻止したけれど闘いはこれからだ」「韓国はアメリカの植民地ではなく、トランプは韓国の皇帝ではない」「自主権なしに平和も統一もない」などまさに、現在の韓国の問題の本質を見抜きこれからの方向性を示した発言が多かった。真の光復のために、これからの闘いは反米自主だ。そして、今日からその闘いが始まるのだ。

大会の間に日本から韓統連と日韓平和連帯約100名の参加があると紹介されたときは大きな拍手が起こった。私たちは日本から熱気ある大会に参加して感激しているのだが、韓国の闘う人たちも日本からの参加者に力をもらっているようだ。まさに国際連帯の相乗効果だ。そして連帯の絆がより深まった。

2時間の大会が終わり、デモに入った。夜の7時から野外で大会をして9時に終わりそこからデモをするというのがさすがだと思った。闘いは止まることがない。闘いはこれからだという主催者の強い決意が感じられた。

このデモが感動的であった。私たちは主催者の配慮でデモの先頭に立った。ブンムル（農楽）の軽快なリズムにのって夜の街を大デモ隊は出発した。デモは車道の4車線を占拠する壮観そのものであった。「韓米合同軍事演習を中止せよ」「米国に立ち向かい主権と平和を実現しよう」大会で使われていた大きなスピーカーも一緒に移動し、先導者の車からのシュプレヒコールが街全体に大きく反響する。

警備の警官隊がデモ隊の両側に並んだが、夜の安全対策のためか、各自点滅して光るものを胸に装着しており、それがずらりと並ぶのでよりネオンサインのように輝きデモ隊が映えた。警官隊もデモを規制するというよりはデモ隊を守っているように思えた。

2年前に来た時の日本大使館前での強圧的な荒々しい警察官の規制とは大きな違いだ。政権が変わるといえるのはこういうことなのかと実感した。

途中、デモが停止し、長く停止した状態が続いていると、ある青年が先導者のトラックの上からマイクをもって訴えた。

「皆さん、私は今回のデモの申請をした民弁（民主社会のための弁護士をつどい）の会長です。今、警察が事前に申請して許可されたデモの進行を妨げています。これは、憲法に定められた集会、デモの自由に違反する明確な不法行為です。憲法違反です」「南大門警察署長に警告する。今すぐデモを通しなさい。そうしないとあなたたちを現行犯で逮捕する」。彼は何度も何度も訴え、そしてデモは再び出発した。

「ただちに現行犯で逮捕する」というのは日本では警察がデモ隊に発する言葉であるが、韓国では反対だ。そう、この国は革命の国なのだ。国民主権の国であり、大統領であろうと問題があれば任期途中で辞めさせることができる、そして辞めさせてきた国なのだ。その「光の革命」の核心がこのデモ隊だ。その中に私たちがいる。闘う民衆の力強さ、みなぎる自信を体感したデモであった。

今回の大会とデモに参加して私は確信した。真の光復は必ず実現する。朝鮮半島の平和と統一は必ず実現する。そして、私たちは勝利する。闘う韓国の民衆と連帯して韓日民衆が闘い続ければ必ず勝利する。

勝利の確信をもって、そしてその勝利の第一歩を踏み出した歴史的な光復80年大会であった。



【編集後記】

李在明大統領の誕生は、尹錫悦退陣運動のゴールであると同時に
社会大改革運動のスタートだ

金昌五（キム・チャンオ）

私は昨年（2022年）の8月9日から11日にかけて「自主・平和・統一！ 光復79周年 韓統連訪問団」を結成し、日韓平和連帯の仲間とともに韓国・ソウルで開催された「戦争助長、韓米日・韓日軍事同盟推進 尹錫悦（ユン・ソンヨル）退陣！ 8・15汎国民大会」に参加した。

すべての行事が終了した後、日韓平和連帯の西山代表と「来年は、光復80年の大きな節目の年なので、韓統連と日韓平和連帯で100名の代表団を構成して参加しましょう」と約束しあった。また、進歩連帯のハン・チュンモク代表とは、「これからの一年間、尹錫悦退陣闘争を一生懸命闘って、来年の光復80年を平和と統一の祝典として迎えよう」と約束しあった。期せずして、今年の8月、二つの約束が実現した。

この報告集は、歴史的な光復80年韓国訪問団の記録だ。訪問団の規模が大規模だったので個別に交流する時間を十分に持つことができなかったが、この報告集がその不足分を十分に補ってくれるものと思う。個人個人が見て聞いて感じた貴重な経験を多くの人と共有したいと思う。

8・15ソウル大会のハイライトは、何といても8月15日の夜遅くに行われたデモ行進だった。警察との一大攻防戦があったが、その顛末（てんまつ）がわからなかった人も多いと思われるので、ここに記録しておきたい。

もともと8・15市民大会は、光化門で開催される予定であったが南大門に場所が変更になった。その理由は、政府主催の「大統領国民任命式」が同日同時刻に開催されることになったためだ。政府側と市民運動側で協議した結果、任命式を光化門で行い、市民大会は南大門で行うことになった。それに伴ってデモ行進のコースも変更になった。

8月15日当日は、予定通り市民大会が午後7時から開催され、午後9時からデモ行進が行われた。ところが行進が始まって間もなく、2台のパトカーがデモ隊最先頭のトレーラーの前にはりついてデモ行進を妨害したのだ。警察側の言い分は、「国民任命式を終えて帰路に就く李在明（イ・ジェミョン）大統領の安全を確保するため」とのことらしい。デモ行進の指揮者たちがパトカー周辺のあちこちで猛然と抗議した。トレーラーのマイクでは民弁（民主社会のための弁護士の集い）の会長が「平和的デモの妨害は明白な法律違反だ。直ちに妨害をやめろ。やめなければ法的に処罰する」と繰り返し警告し、デモ隊は「チャ・ペラ！（車をどけろ！）」「ピョンファシイ・ポジャンハラ（平和的デモを保障しろ）！」のスローガンを繰り返した。

しかし、らちが明かないためデモ隊は実力行使に出た。各界代表で構成されたデモの最前列のメンバーが横幕を持ったまま、走ってパトカーの前に移動してきたのだ。民主労総のヤン・ギョンス委員長や正義記憶連帯のイ・ナギョン理事長の姿もあった。それに続いて次から次へとデモ隊のメンバーがパトカーの前に走って移動してきた。デモ隊の進行を妨害していたパトカーはデモ隊に挟まれる格好になり右往左往していた。そして最後に旗をもって空色のTシャツを着た100名を超える大学生の集団が大歓声を上

げながら猛然と走ってデモ隊の最前列に躍り出たのだ。警察はなすすべもなく、デモ隊は4車線の道路いっぱいに広がり、まるで解放区のようになった。

戒厳令に打ち勝った韓国民衆のパワーをまざまざと目にした瞬間だった。また、デモ隊と警察との攻防戦は「李在明大統領の誕生は、尹錫悦退陣運動のゴールであると同時に、社会大改革運動のスタートだ」ということを象徴的に示すものでもあった。その新たな闘いのスタートを、「光りの革命」の現地ソウルで、韓統連と日韓平和連帯のメンバー100人が、韓国民衆とともに迎えることができたことは実に意義深いことだと思う。

幼児を除けば10才から92才まで実に幅広い参加者だったが、大会期間中みんなの顔はキラキラ輝いていた。その姿を見ながら私は、サミュエル・ウルマンの「青春」という詩を思い出した。

青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の様相をいうのだ。

たくましい意志、豊かな想像力、燃える情熱、臆病をしりぞける勇氣、安易を振り捨てる冒険心、こういう様相を青春と言う。

年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて人は老いる。

人は信念と共に若く、疑惑と共に老いる。

人は自信と共に若く、恐怖と共に老いる。

希望ある限り若く、失望と共に老い朽（く）ちる。

精神が皮肉の雪に覆われ悲歎の氷に閉ざされるとき、20才であろうと人は老いる。

頭を高く上げ希望の波をとらえる限り、80才であろうと人は青春なのだ。

2025年8月、私たちはソウルで青春の真っ盛りを生きていた。これからともに青春を生き続けて行きたいと思う。

歴史的瞬間をともに経験した、韓統連と日韓平和連帯の参加者の皆さん、本当にご苦労さまでした。そしてありがとうございました。

また、ご多忙中、感想文を寄せていただいた皆さんに心から感謝します。ありがとうございました。

追伸

- ① 今回の報告集は、予算など諸般事情を考慮して、紙媒体ではなくデータで配信することにしました。データ配信の利点（閲覧も配信もすべて無料）を生かして多くの方々と共有していただければと思います。なお、データ配信に不慣れな方には、プリントアウトして広めてもらえればと思います。
- ② 編集にあたっては、感想文にタイトルの指定がなかった方の原稿には、編集者の方で任意にタイトルをつけさせていただきました。また、従軍慰安婦などの表記は、すべて、日本軍「慰安婦」に統一させていただきました。ご了承ください。